麻帆良に舞い降りし夜天の聖王

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麻帆良に舞い降りし夜天の聖王

【Ｎコード】
Ｎ２１１３Ｉ

【作者名】
アルト

【あらすじ】
－現在修正中－

作者が納得できない部分が幾つかありまして、今、現在大々的に修正中です。更新を楽しみにしている方には申し訳ありませんがもうしばらくお待ちください。内容についてはそこまでは変わらないと思います。

プロローグ（前書き）

※3月23日　編集

主人公の性格と導入の仕方を変えました。

今回はプロットもしっかり考えてあるので大丈夫だと思います。

プロローグ

ｓｉｄｅ　主人公

今日、俺は死んでしまった。それも俺らしくないことをして死んでしまった。よりにもよって子供を庇って交通事故ってどんだけテンプレなんだよ。

それにしても・・・・なんで、助けちまったんだろう。普段の俺だったら、絶対に助けないで放っておいたはずなのにな・・・・・この間のことで気が変になっていたんだな。

「はぁ～、死んだのか。以外に呆気なかったな。まだいろいろやりたいことあったのにな。見たいアニメや漫画いっぱいあったしな。あと・・・・」

研究の方も、もう少し続けたかったな。

もう少しで宇宙の始まりとビックバンと粒子の関係について、なにか掴めそうだったのにな。論文も、もう少しで完成だったのに・・・・

「ああ～、それに漫画も魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅとか魔法少女リリカルｖｉｖｉｄとか最後まで読みたかった。というかリリカルなのはだけは完結するまでは生きたかった。はぁ～、それしてもここ何処だ??」

周りを見渡す・・・・・どこもまでも漆黒の闇がつづいている。

「此処は高次元世界じゃ」

突然、俺の後ろで輝いたかと思うと。白っぽい服を着て、髭を生やした、いかにもな神様ですって雰囲気をかもし出している爺さんがいた。

まさかな？

うーん、高次元世界？？　確かにそういば・・・そんな理論がどこかの本に載っていたな気がしたけど、詳しくは覚えてないな。

それにしても、あのコスプレ・・・・キリストのコスプレか？

「ワシは、頭も逝ってなし、この服はキリストのコスプレではない。ワシは神じゃ」

！？　まさか、俺の心を読んだ？　いや・・・もしくは脳波を読み取られたか。そういう装置を米軍が開発をしようとしていると聞いたが・・・・もう完成していたのか！？

「いや、そういう装置は使っておらんよ。ワシは正真正銘、全知全能の神ゼウスじゃ」

ゼウスって・・・ギリシャ神話の主神かよ。全知全能ではないだろうむしろ・・・・・・

「・・・浮気者でだめな神か」

「お主・・一応、ワシは最高神じゃぞ。失礼だとは思わんのか？」

あんまり思わないな。もともと、神なんて信じてなかったしな。

まぁ、本物の会ったからには信じてもやってもいいけど・・・・・

しかし、本当に本物か？

「疑り深いのう。そういえば、まだ名前を聞いていなかったのう」

「ああ、そういえば・・・そうだな。俺の名前は黒葉（くろば）カイだ」

「そうか・・・黒葉カイ君か。ではカイ君、突然でなんじゃが、君をネギまの世界にとばす」

え？　い、今この神様もとい浮気神はなんて言った・・・ネギまの世界にとばす・・・・・ネギマノセカイニトバス・・・・・・・

「はぁぁぁーーーー！！！？　なんだよそれ！！！　なんで、よりにもよってネギま！なんだよ！！？」

俺ははっきり言ってネギま！が、それほど好きではない。途中からの意味不明の気合ですべてを解決する展開が嫌いだからだ。

それに何より熱血が大嫌いだからだ。はっきり言ってネギが雷速の

速さを手に入れたらなら、その速さを利用してさっさと一人で明日菜を助けに行かないのかとか。あと一番気に入らないのがアンケートに頼ってストーリーを進めていくやり方だ。アレは本当に駄目だな。作品の方向性くらい作者自身で決めろよ！　だから途中から矛盾だらけなるんじゃないか。魔法世界編なんかまさにそうじゃないか。なぜか綾瀬夕絵が指名手配のはずなのに魔法学校に何の疑いもなく入れたり、魔法世界の時間の地球時間とズレるなんってマジありえないだろ。公転周期から時間のズレるなんてありえないしな。マジ矛盾だよな。

「確かに、君は死んだ。じゃがそれは天界にとって予想外なことじゃった。じゃから君には転生、第二の人生が与えられるのじゃ。ネギまはもう決定事項じゃ！」

な、なんでだ！　その幽遊白書的な感じは！？　せめて似たようなリリカルなのはにしろ！！

「とういか、それなら幽遊白書みたいに黄泉がえせ！！」

「無理じゃ。幽遊白書と違って君の体はスプッラタじゃからな」

なんで無理なんだよ！　ちくしょう！！　というかなんで幽遊白書知ってるんだよ。

「ワシの兄のハデスやポセイドンたちもみな読んでいるぞ名作じゃからな。それにわしはリリカルなのはも読んでいるぞ。もちろんネギま！もな」

それでいいのか、天界！？

「いいんじゃね」

「よくねぇだろ！！」

「まぁ、そんなことより君をただでネギま！の世界行かそうなんて言わん。とりあえず近衛木乃香の3倍の魔力をやろう」

「・・・・・そこは無限の魔力とかじゃないのか？」

「それはのぅ、人間の身体で無限に近いエネルギーを留めるにはかなり君の身体を改造し、神族に近しい存在にしなければならん。それは幾らなでものぅ・・・・そのかわりと言っては、なんじゃが成長にはかなりの補正を付けよう」

う～ん、確かに人間の身体で無限のエネルギーを留めるのは無理か・・・・まぁ、それに近衛木乃香の3倍もあれば十分か。それに補正があるだけで十分だ。

「・・・・くれるのは魔力だけだけか？」

「そうじゃな。君には5つまでの好きな能力なんかを上げよう・・・・・あ、でもワシでも無理なのは幾つかあるぞ」

5つか・・・・結構くれるんだな。でも、その代わり無理なのもあるのか。

「アンタ、全知全能じゃなかったのかよ？　・・・・それで無理なのはなんだ？」

「例えばのう、赤屍蔵人や涼宮ハルヒの能力などじゃな」

そこらへんの意味分からない奴らのか・・・・赤屍蔵人にしたって死が想像できないだけで死ななかったり、雷帝のプラズマを受けても無傷と意味分からないくらい強かったしな。涼宮ハルヒにしたって対外だしな。世界改変の能力はまだ不明な部分が多いからな。

まぁ、どっちも選ぶ気はあまりなかったけどな。

「ああ、あと直死の魔眼も無理じゃな」

直死の魔眼もか・・・・これも選ぶ気はあまりなかったからいいけど。でも、なんで駄目なんだろうか。前のに比べると、そこまでな能力ではないよう気もするけどな。

「なんで駄目なんだ？」

「いくらワシが最高神と言えども根源の力を自由にはできないからのう。じゃから根源やそれに関連する物は無理じゃ・・・・・じゃがU・B・W（アンリミテッド・ブレイドゲウター・オブ・バビロン）や王の財宝は可能じゃぞ」

U・B・Wか王の財宝か・・・・・・どっちもそこまで欲しくないな。

でもなぜかみんなここでU・B・Wや王の財宝を選ぶんだろうか。はっきり言って威力が不足しているだろ。エクスカリバーと乖離剣エアのぶつかり合いの余波で公園ひとつ破壊できないんだぞ。さらにはギルガメッシュが本気で放った乖離剣ですら冬木市を滅亡にもっていけなかった。威力不足にもほどがある。まぁ、確かに王の財宝には他の便利な道具も入ってるって利点もあるが

それでも俺はそこまで欲しいと思わないしな。俺が使えると思う法具が大半の勝負を勝ちにもっていけるゲイ・ボルグとあらゆる魔術を初期化できるルール・ブレイカーくらいだもんな。それでなくともゲイ・ボルグは殺すこと前提の法具だし、使うのが難しいしな。

それに王の財宝よりもドラえもんの四次元ポケットの方が便利だろう。あの道具の利便の多さ、素晴らしいだろう。

それに英霊の強さは霊体だからこそだ。それを差し引けば原作者の奈須きのこさん曰く、その強さは戦闘機一機くらいだって公言してるしな。ネギですらイージス艦より強いって設定だもんな、それに対して戦闘機一機じゃあ・・・ちょっと、なあ。

それに俺の場合はもちろん生身で戦うわけだし、霊体になぞなりたくはなし・・・・というわけでいらないな。

「王の財宝がいいなら。それは道具でもいいのか？」

「別にそれはかまわんぞ」

「じゃあ、決まった・・・・・1つ目は夜天の書をくれ。ただしバグと闇の部分は修正して」

「ほぉ～、それを選ぶのかのぅ。珍しい物を選ぶのぅ」

「そうか？　そうでもないと思うが・・・・・」

はっきり言って夜天の書はかなり便利だろう。なによりすぐに戦闘経験が豊富な戦力が手に入る。ヴォルケンは付いてくるし、ユニゾンデバイスであるリインフォース・アインも原作でもかなりの強さ

を誇っていた。同じ意味でサーヴァントも考えたが・・・・・性格、やや問題ありなので却下だ。

「次に二つ目は凄まじく高性能なデバイスをくれ。具体的に言えばかなりの強度と高度な演算とＡＩも付けてくれ。さらにリリカルなのはに登場したすべてのデバイスデータと魔法データを入れてある物がいい」

夜天の書に合わせて高性能なデバイスは必要だよな。原作でもはやてのシュベルトクロイツは何度も改良を重ねていって完成させたはずだ。

でも俺はやっぱり、シュベルトクロイツとは違う物が欲しいんだよな。シュベルトクロイツはどちらかと言うと広域魔法専用って感じだしな。やっぱり、ちゃんとレイジングハートみたいに細かい魔力コントロールやバルディッシュみたいな接近戦用もカバーしたいしな。

「それも大丈夫じゃ」

「三つ目はユニゾンデバイスのリインフォース・Ⅱ（ツヴァイ）とアギトをくれ」

これは戦力増量だな。シグナムやヴィータのパワーアップのためだな。

「うむ、それも問題ないぞ。ワシの力でどうにかなるぞ」

「四つ目はロストロギアをなるべくたくさんくれ。ジュエルシードやレリックやゆりかごもな」

「お主、本当に変わっておるのぅ。そんな物をどうするのじゃ？
ゆりかごはわからんでもないが、ジュエルシードなぞ余り役たたんと思うぞ」

「いいんだよ。それは研究の為に使うんだから」

「研究？」

「そうさ。ジュエルシードなんか超楽しい研究対象じゃないか！！
なんで、あんな小さい物体に次元を崩壊にもっていけるほどのエネルギーを詰め込めるのかとか！　どうして人の願望なんかでエネルギーが増幅するんだとか、研究しがい有まくりだろう！！」

本当に研究のしがいがあるものばっかだよな。

過去の偉人達が残したロストロギア。それには偉人達のすべてがそこに詰まっている。まさに、ロマンだよな。

「本当に変わっておるのぅ。それならアカシックレコードをくれと言わばいいじゃろ・・・・・・・まぁ、ワシはお主にアカシックレコードを与えることができないんじゃが」

コイツ！？　なんでロマンが理解できないんだ！！？

そんな詰まんないことして何が楽しいんだ！　新たな発見をした時の達成感、それが分からないのか！

それにアカシックレコードを与えられないなら言うな！！

「それで、可能なのか？」

「まぁ、すべてのロストロギアはやれんがなるべく用意しよう」

やったぜ。これでまた研究ができる。

「最後はヴォルケンズとリインとアギトと俺の戸籍。家とある程度の財産だな」

これが無いと生活も何にもできないからな。

「それは最初から与えてやるつもりじゃったんじゃが、最後はそれでいいのかのぅ？」

何？　最初から与えてくれるつもりだった・・・・・・俺は、今ちょっとコイツを見直したな。

ある程度の常識はあったんだな。

「お主、さっきから失礼じゃと「あ～。わかった。わかったから」・・・」

「ん～、それなら家と財産をかなり豊かにしてくれ・・・・・・・・・あ！　そうだ。家に無限書庫付けてくれよ」

「はぁ～、お主というヤツは・・・・・最後のは可笑しいじゃろう。アカシックレコードと似たようなもんじゃろ」

「違うな。無限書庫の読まなければ詳細はわからないじゃないか。それにアカシックレコードとは情報量が違うだろ」

「まぁ、そうじゃがな」

まぁ、本当のところは暴走させた時のための保険だな。

暴走してから調べるのは若干遅い気がするが、そん時は、そん時だな。

「それで、いいのか？　駄目なのか？」

「・・・いいじゃろう」

やったな。これで嫌なネギま！の世界とはいえ、楽しく過ごせそうだな。

「では、まずお主に魔力を与える。ワシの手を握るんじゃ」

俺は爺の手を握るのに若干の嫌悪感を覚えつつも、言われたと通りに手を握る。

すると握った手が光だし身体が何かに包まれる。それは今まで感じたことの無い温もりだった。そして光がなくなると俺の身体の周り魔力と思われる粒子の様な物が溢れ出していた。

「これが魔力か・・・・・・それにしても、この魔力光は・・・これは・・・」

この魔力光には見覚えがある。これはＳｔｒｉｋｅｒＳで物語の鍵を握った虹色の魔力光・・・・

「それは成長の補正のおまけじゃ。身体の方も劇中の物とは若干の違いがあるがかなり丈夫な身体にしてやったぞ」

やはり、これは聖王のヴィヴィオの虹色の魔力光（カイゼル・ファルベ）か。

「聖王の鎧なんかの能力も使えるのか？」

「それは使えるのぅ。ただしレリックとの融合はできなくしておいたぞ。その代わり身体能力、筋力、持久力、俊敏性、瞬発力、空間把握能力、動体視力なんかを上げておいてやったぞ」

レリックとの融合ができなくても、問題は無いな。あんまりする気は無かったし。

「では次に夜天の書じゃ」

そう言うと爺さんの手がまた光、その手の中に夜天の書があった。

「待っておれ、今、バクと闇の部分を修正するぞ」

また手が光りだして、そして光が数秒間、光続けた。いちいち光らせる必要があるのだろうか。それても演出か？　まぁ、どっちでもいいか。

そして、光が収まり、爺さんは俺に夜天の書を手渡す。

「なぁ、これどうやって起動させるんだ？」

「お主が魔力を込めれば起動するぞ。ただし今は止めて欲しいのぅ。向こうに着いてからするのじゃぞ。修正のついでにページの方も埋

めといてやったぞ」

起動させるのは向こうに着いてからか、まぁ、妥当なところか。それにページが埋められてるのは助かるな。向こうで魔力を集めるとなると魔法使い達と絶対にトラブルになるだろうからな。

「次にデバイスじゃな、ほれ」

爺さんは俺に向かって何かを投げる。それを受け止めると、どうやら指輪のような物だった。

「指輪方のデバイスか？」

『Ｈｅｌｌｏ．　Ｉｔ　ｓｔａｒｔｓ　ａｎｄ　ｉｔ　ｍａｓｔｅｒｓ　ｉｔ．（こんにちわ。始めましてマスター）』

突然に喋りだす指輪、もといデバイス。

『Ｔｏ　ｃｏｍｅ　ｓｔｒａｉｇｈｔ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｐｏｉｎｔ，ｐｌｅａｓｅ　ｍａｓｔｅｒ，　ａｎｄ　ｇｉｖｅ　ｔｈｅ　ｎａｍｅ　ｔｏ　ｍｅ．（早速ですがマスター、私に名前をください）』

「う～ん、名前か・・・・・そうだな・・・・」

俺は指輪をよく見て見る。宝石部分が俺の魔力光と同じ虹色をしている。

「そうだな、お前の名前はレーゲンボーゲンだ」

『Consented masterring. Regenbogen is registered.（了解しました、マスター。レーゲンボーゲンを登録します）』

「レーゲンボーゲン・・・ドイツ語で虹という意味じゃな。でも、なぜドイツ語なんじゃ？」

「なんとなくだよ。夜天の王になる訳だし、聖王の身体をもらんたからな」

「でも、そのデバイスはミッドの方に近いんじゃがな。ベルカのハイブリットじゃがな。まぁ、いいかのう。次はリインフォース・Ⅰ（ツヴァイ）とアギトじゃったな」

今度は光らずに空間が割れてそこから何か落ちてきた。そして、それを渡される。

「これは・・・・」

「蒼天の書じゃ、その中に二人が入っておる。ちなみにそれもお主が魔力を込めれば起動するようになっておる」

「わかった」

「次にロストロギアじゃったな。ほれ」

俺は爺から白い袋を渡される。

これは、どう見ても・・・・アレだよな。ネコ型ロボットさんのあのポケットにしか見えない。

「おい、爺さん。これって、四次元ポケットじゃねえか？」

「そうじゃが・・・中身はロストロギアしか入っとらんぞ。もちろん秘密道具なんかも入っとりゃせんぞ。とりあえず入れ物として便利じゃったからそれにしただけじゃ。ゆりかごとかを入れるにはそれくらい必要じゃったからな」

確かに、ゆりかごをどうやって持ち運びや隠すのが悩みだったから、正直にありがたいな。

でもちょっと秘密道具にもいくつか研究してみたい物があったが、それはいいか。

「最後の戸籍と家と財産と無限書庫は向こうに用意しておくぞ」

「わかったよ。ちなみに原作のいつに行くんだ？」

「三年前じゃ。お主にも準備が必要じゃろう」

そうだな。俺もいろいろやりたい事もあるし、魔法の方もどうにかしないといけないからな。

「では、そろそろ行ってもらえるかのぅ」

空間に扉が現れた。

「ああ、行ってくる」

俺は扉を開け、その向こうへと歩を進めた。

s
i
d
e

o
u
t

ｓｉｄｅ　ゼウス（？）

「やれやれ、やっと行ったわね」

私はゼウスの変身を解き、一息つく。

「それにしても・・・・全然“アイツ”には似て無かったわね」

それでも、一番近くて能力が高かったのは彼に間違いはなかったのよね。

「とりあえず・・・・・・することはしたし、計画の第二段階は成功かな」

後は彼次第なんだけどね。

あの世界にも仕込みもしといたし、夜天の書の方にもヒントを記した・・・・・大丈夫でしょう。

「さてと、あとは待つだけで・・・」

あと私にできることは、この鈍った身体の感覚を戻すくらいか。

頼むわよ、すべては貴方にかかってるんだから・・・・・・・

プロローグ（後書き）

最後のは一応、伏線です。

いつ明かすかと言うと物語のかなり最後の方になります。

第1話（前書き）

※4月1日　編集

アインの口調が若干可笑しいですがご了承ください。

第1話

ｓｉｄｅ　カイ

「・・・・ここは何処だ？」

確か、ネギま！の世界に来たはずだが・・・・ここはどこかの家みたいなんだな。

うん？　手紙か、机の上に手紙が置いてある。

俺は手紙を開けてみる。

「え～と、何々『まずその家はお主の自由にしてよい、お主の物じゃ。通帳や印鑑などのものはリビングの棚に入れておくぞ。ちなみに預金通帳の暗証番号はお主の誕生日にしてある。戸籍については天涯孤独の資産家の息子ということにしておいた。ヴォルケンズやユニゾンデバイス達についてはお主の親が引き取ったということにしておいた子供ということにしたぞ。最後にお主の身体を少し縮めておいたぞ』・・・・・何、身体を縮めた？」

そういえば・・・目線が低いような。

俺は急いで鏡のある洗面場にかける。

「くっ！　やっぱり、縮んでる！！」

見た目からして１２、１３歳か。

「チッ、身体を縮めるとかめんどくさいことを」

悪態を吐くが誰も聞いてくれない。

俺は身体のことをひとまず置いておいて家の中を調べることにした。

この家は調べた結果、この家は俺が思った以上に大きかった。トイレは６つにお風呂が３つ、部屋も和室に洋室とかなりの数ある。その中にはちゃんと無限書庫もあった。ちなみに住所はやはり麻帆良学園のほど近くにあるようだ。

その他にもいろいろ分かった事がある。まず、日付は２０００年２月１日のようだ。次に預金通帳には１００億ほど入っていた。そして俺の年齢は保険証から１２歳であることが判明した。ご都合主義でネギま！の生徒達と同じ年齢らしい。

家とお金に関しては豊かにしてくれとは言ったがここまでしてくれるとは思わなかったな。前世の俺の家もある程度は大きい方だと思ったが、ここまでではなかったな。まぁ、その代わり身体は縮んだがな。

「さて、そろそろ夜天の書と蒼天の書を起動させるか」

でも、このまま起動させるのは不味いか・・・・・魔法使い達に気づかれちまうな。結界を張ってからだな。

「レーゲンボーゲン、ここら一帯に結界を頼む」

『Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．　Ｈｏｗｅｖｅｒ，　ｐｌｅａｓｅ　ｍａｓｔｅｒ　ａｈｅａｄ　ｏｆ　ｔｈａｔ，　ａｎｄ　ｇｉｖｅ　ｔｈｅ　ｉｍａｇｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｆｏｒ　ｓｅｔｕｐ　ｏｆ　ｍｅ　ｓｈａｐｅ　ｔｏ　ｍｅ．　（了解しました。ですがその前にマスター、私をセットアップするための私の形のイメージをください）』

そうか、セットアップの前にレーゲンボーゲンの形を決めなくちゃいけないのか。

うーん・・・・・とりあえずはレイジングハート・エクセリオンといっしょでいいか。

「データの中のレイジングハート・エクセリオンの物と同じにしてくれ」

『Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．　Ｔｈｅｎ，　ｔｈｅ　ｓａｍｅ　ｔｙｐｅ　ａｓ　Ｒａｉｓｉｎｇ　Ｈｅａｒｔ　Ｅｘｅｌｉｏｎ　ｉｓ　ｔａｋｅｎ．Ｔｈｅｎ，　ｐｌｅａｓｅ　ｓｅｔ　ｕｐ．
（了解しました。ではレイジングハート・エクセリオンと同じ形をとります。それではセットアップしてください）』

「森羅万象の７色を司りしモノよ、我に力を与えたまえ。レーゲンホーゲン、セットアップ！」

レーゲンボーゲンの形が変わり、レイジングハート・エクセリオンと同じ形の杖となった。

『Ｎｅｘｔ，　ｐｌｅａｓｅ　ｉｍａｇｅ　ｔｈｅ　ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ．　（次にバリアジャケットのイメージをお願いします）』

これはレイジングハートと同じのにするのは不味いよな。スカートはさすがにないな。

いいや、めんどくさいからＦＦ８のスコールの服装でいいか。かっ

こいいし。

『Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．　Ｔｈｅ　ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ　ｉｓ　ｐｒｏｄｕｃｅｄ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｉｍａｇｅ．
（了解しました。そのイメージでバリアジャケットを製作します）』

こうして俺のバリアジャケットはＦＦ８のスコールぽい物となった。

あんまり似合ってはいないが、まぁ・・・いいか。

「じゃあ、レーゲンボーゲン。今度こそ結界を頼む」

『Ｃｏｎｓｅｎｔ．　Ｔｈｅ　ｃｌｏｓｅ　ａｒｅａ　ｉｓ　ｄｅｖｅｌｏｐｅｄ．　（了解。封時結界を展開します）』

結界が発動し、この家全体が外界と切り離される。

「よし、これで魔法使い達に気づかれることもないだろう」

とりあえずは蒼天の書から起動させるか。メインディッシュは後に取って置こう。

俺は蒼天の書へと魔力を込める。

『Ａｎｆａｎｇ（起動）』

すると蒼天の光輝きだし、古代ベルカ式の魔方陣が浮かび上がる。

そして光が収まると・・・・

「――――問おう、貴方がリインのマイスターか？」

なんかネタに走ったバカが現れた。

「・・・・・はぁ～」

俺は思わずため息をもらしてしまう。

「あ、あれ～？　受けが悪いですね。リインの鉄板ネタだったんですけど・・・これでマイスターの心をガシッと掴めるはずだったんですけど」

＜バッシ＞

アギトが飛び出しリインの横へと跳び、頭を殴った。

「当たり前だろ！！　バッテンチビ！　本当にそんなネタが受けるとでも思ったかよ！！」

「思ってましたよ！！　オタクならこのネタは鉄板で受けると思ってましたよ！！！　それに痛いですよ！　アギトちゃん！！」

「そんなに強くやってなだろう。そのネタは古いだろう！」

「古くないです！　運命ネタは永遠ですぅー！！」

「永遠じゃあないだろう！　あの会社は終わってるだろう。デモンズソウルで徹夜してまほよの発売を延期してるだぞ！」

「そ、それは確かに事実ですが・・・・それは原作者のせいですぅー！」

「その原作者が駄目なんだろうが！！　どこの冨樫だ！！」

「た、確かにどちらも人間としては駄目ですが、作品は面白いじゃないですかー！！」

「面白いのは認める。だけど大人としてちゃんとすることはするべきだろう！」

「うわ、まったくもっての正論。言い返しずらいですぅー」

「それにきのこめ・・・なんでまほよはエロが無いんだーー！！
誰が得なんだ！！　みんな青子さんドＳのエロを求めてるはずだろーー！！」

「それ関係ありますか？」

「関係は無い！　だけどな・・・・・」

これはそろそろ止めるべきだな。いろいろヤバイ発言があったし・・・・・賛同するところもあるけどな。

それにしても二人ともこんな性格だったか？

性格変わりすぎだろ。あのボケ爺め・・・それよりも、そろそろツッコミをいれるか。それにしても両方ボケってどうゆうこと

だよ。両方共ボケじゃ漫才に成立しないだろう。

俺は近くにあった新聞紙を丸めて筒状にして構える。

＜パンッ　パンッ＞

二つ、音が鳴り響く。

「い、痛いですぅ～！」　「い、いてえー！」

「痛いじゃない！　いきなりなんなんだ！？」

「いや～、第一印象は重要かと思いまして・・・・それにしてもナイスツッコミです！　マイスターカイ！」

第一印象が重要なのは分かるが・・・・・しかし、アレは無いだろう。

「なかなか一撃だったぜ・・・いいぜ。お前をアタシのロードとして認めてやるよ」

いや、それはシグナムに言ってくれよ。お前の嫁（ロード）はシグナムだろう。

というか俺はアギトとユニゾンできるのか？

リインとは恐らく問題なくユニゾンできるはずだよな。蒼天の書は夜天の書の後継機なわけだし・・・・しかしアギトは違うからな。でもゼストでもできたんだし可能かな。ああ、でも融合事故ってのもあったな。とりあえず今は保留だな。

さてと、夜天の書を起動させるか。

俺は夜天の書を持ち上げる。

「あれ～、カイ君。夜天の書をまだ起動してないんですかー？」

「ああ、そうだが・・・・ん？　そういえば、リインに名前教えたか？」

「ああ、それはですね。蒼天の書の中にカイ君のデータがあったので・・・でも夜天の書には入ってないみたいですね」

なぜに俺のデータが蒼天の書に入ってる。あのクソ爺め・・・・・

「はぁ～。まあ、いいか。さっさと夜天の書を起動させるか」

俺は夜天の書に魔力を込める。その時、なぜかリインとアギトが俺の肩の乗った。

『Ｉｃｈ　ｂｅｆｒｅｉｅ　ｅｉｎｅ　Ｖｅｒｓｉｅｇｅｌｕｎｇ（封印を解除します　）』

夜天の書の鎖が外れ、俺のリンカーコアに反応して膨大な魔力が解き放たれる。

『Ａｎｆａｎｇ（起動）』

古代ベルカ式の魔方陣が描き出され、その中からヴォルケンリッターの面々が現れる。

「闇の書の起動を確認しました」

認識はまだ闇の書なのね。あの爺、本当に修正したのか？

それにしても、シグナムは本当にいい胸してるな。実物はすごい。やっぱり女性は胸が大きい方がいいな。

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

う～ん、シャマルって言えばとりあえずぶちまけろだよね。その意思はしっかりと某錬金戦士に受け継がれたしな。

「夜天の主の元に集いし雲」

ザフィーラ見て思ったな。男のイヌ耳はないな。まぁ、俺はネコ耳派なんだけど・・・・ああ、イヌ耳といえばこの世界には小太郎とかいうヤツがいたな。俺はアイツことがネギより嫌いなんだよな。熱血全般が駄目なだけなんだけどな。

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

ヴィータか・・・・やっぱりというか、ロリなんだな。エヴァと若干会わせてみたいな。性格が大分似てる感じがするし・・・・友人関係を持ったらいい仲になりそうだよな。どっちもエターナルロリータなわけだし。

あれ？　そういえばリインフォース・Ⅰが出て来てないな。どうしたら出て来るんだろうか・・・・・原作みたいに逆ユニゾンしなきゃいけないなんてことは無いよな。それは流石に嫌だな。

リインあたりにでも聞いてみるか。

「リイン。管制人格（リインフォース・Ⅰ）はどうやったら出て来

るんだ？」

「さぁ～、適当にやればどうにかなるんじゃないんですか～」

適当にやればって・・・それじゃあ、駄目だろう。

それにしてもどうするかな・・・・・

『・・・ｍａｓｔｅｒ』

「ん？　どうかしたか、レーゲンボーゲン？」

『Ｉ　ａｃｃｅｓ　ｔｈｅ　Ｂｕｃｈ　ｄｅｒ　Ｎａｃｈｔｈｉｍｍｅｌｓ，　ａｎｄ　ｉｎｔｅｒｆｅｒｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ｐｒｏｇｒａｍ？（私が夜天の書にアクセスして、管制人格に干渉してみましょうか？）』

「そうか。それじゃあ、頼む」

『Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．　Ｔｈｅｎ，　ｐｌｅａｓｅ　ｂｒｉｎｇ　ｍｅ　ｃｌｏｓｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　Ｂｕｃｈ　ｄｅｒ　Ｎａｃｈｔｈｉｍｍｅｌ．　（了解しました。では私を夜天の書に近づけてください）』

俺はレーゲンボーゲンを夜天の書に近づける。

「あ、あの主・・・・」

ん？　今、シグナムが何か言ったか？　まぁ、いいか。

『Ｉｔ　ｂｅｇｉｎｓ　ｔｏ　ａｃｃｅｓｓ　ｉｔ．　（アクセスを開始します）』

レーゲンボーゲンが夜天の書へのアクセスを開始すると、再びベルカ式の魔方陣が描き出されていく。

その様子をヴォルケンリッターの面々はを唖然とした表情で見ていた。リインとアギトはというと・・・リインはどこかわくわくした表情をしている。アギトはただ腕を組んで夜天の書を見つめていた。

『Ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ｐｒｏｇｒａｍ　ｉｓ　ｓｔａｒｔｅｄ．（管制人格を起動させます）』

夜天の書の輝きがさらに増していく。それと同じく俺のリンカーコアも同調するかのように輝き始める。

『Ｔｈｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ　ｃｈａｒａｃｔｅｒ　ｇｏｅｓ　ｏｕｔ．（管制人格が出ます）』

光が集束していきベルカ式の魔方陣の中からリインフォース・Ｉが現れた。

「きゃ～！　お姉さま～～！！」

俺の肩に留まっていたリインが飛び出しリインフォース・Ｉに飛びつく。

飛びつかれたリインフォー・・・めんどくさいからアインでいいか。アインは混乱しているみたいで、今の状況を理解できていない。

「な、なぜ・・お前が」

「なんで・・・管制人格（マスタープログラム）は４００頁（ページ）を超えなければ現れないはずなのに」

そういえば・・・シャマルとシグナムはアインの存在を薄っすらと覚えているんだけな。

そのことを知らないヴィータはいうと何が起きていているか分からないといった感じだ。ザフィーラは・・・・・無表情で何を考えてるか読めない。

「お姉さま、始めましてですぅ！　リインフォース・Ⅱ（ツヴァイ）と言いますですぅー！」

本気でアインの目が点になってる。

・・・・さてと、この後どうするかな。

side　out

ｓｉｄｅ　管制人格

私は夜天の・・・いや、今は闇の書の管制人格だな。闇の書・・・・・まさしく相応しい名前だ。

私は多くの者を絶望へと送ってしまった。前の主もそうだ。主を管理局の局員に捕らわれしまい、その後に防衛プログラムと完全融合を許してしまい、最後は反応消滅弾によって死なせてしまった。私

が殺したようなものだ。

もっと私が主を守っていれば死なせることは無かったかもしれない！！　もっと・・・・・・・いや、それもいまさらか。

ああ・・・・また転生が始まった。また次の主も絶望させて死なせてしまうのだろう・・・・私はあと何回過ち繰り返せばいい。

どうゆうことだ。転生は完了したはずなのに・・・・・・・・・・・・・・・なのに、なぜ主が存在しない。

転生を完了して始めに行なわれるのは契約だ。主のリンカーコアと契約が行なわれるはずだ。それなのに今回は行なわれない。いったいどういうことな・・・・！！？

くっ、この書にプログラムが侵入してきているだと！？

主との契約も行なわれない、いきなり夜天の書に干渉してくる。これはいったいなんなんだ！

それにしてもなんて速度でプログラムを書き換えていくのだ。

私はこのままでは不味いと思い、干渉しているプログラムを排除しようとするが・・・・・・・・・・なっ！？　私を隔離しただと！！？　ありえない。私はこの書の管理人格（マスタープログラム）だぞ。それを無視して隔離されてしまった。

「・・・いったい、今。この書で何が起きているのだ」

私は現在、夜天の書のあらゆるシステムにアクセスが不可能となってしまった。つまり私は書のコントロールや現状の把握も行なえなくなってしまったというわけか。

だが、これはおかしい。夜天の書には真の主以外にシステムのアクセスはできないはずだ。それでも外部からの無理やりアクセスを使用ならば持ち主を呑み込んで転生するという防御プログラムが発動するはずだ。

・・・本当にどうなっているんだ。

それから時間がかなり進んだ。私はどうにか夜天の書にアクセスをできないか試みたがどうやっても不可能だった。

「これから、私は一体どうすればいいのだ」

その問いに答えてくれる者などいないとわかったいながら言わずにはいられなかった。

そんな時だった・・・・・

「！？　契約が行なわれている！」

私は夜天の書を通して魔力が流れ込んでくるのを感じた。これは夜天の書が新たな主との契約が行なわれた証である。

「それにしても・・・なんて魔力の量と質なんだ」

流れ込んできた魔力の量と質は歴代の主に比べても1、2を争うほど高いものだった。

「守護騎士プログラムが発動している！」

夜天の書の中で守護騎士達のリンカーコアが製作されたのを感じた。
これで恐らく次の主へと転生が完了したことがわかった。

しかし覚醒が早すぎないか？　いや、もともと魔法が使えた主に転生したこともあった。今回もそうなのだろう。

「ッ！？　私に干渉している！！？」

夜天の書の次は私に何かしようとしているか！？

「くっ！　前回より処理速度は遅いがそれでも十分速い」

結局私は何もできずに成すがままとされてしまった。

私はいったいどうなったんだ。私はゆっくりと目を開けてみると・・・・・・・・・

「きゃ～！　お姉さま～～！！」

私にいきなり小さい何かが飛びついてきた。私はその小さい何か見てみると・・・・・・それは私に若干似ていた。

「な、なぜ・・お前が」

「なんで・・・管制人格（マスタープログラム）は４００頁（ページ）を超えなければ現れないはずなのに」

声のして方を見てみると、そこには烈火の将、風の癒し手、紅の鉄騎、蒼き狼がいた。烈火の将と風の癒し手は信じられないといった表情をしていた。紅の鉄騎は困惑している様子だ。蒼き狼は無表情だった。

その他にも小悪魔のような格好をした、恐らくユニゾンデバイス。
そして髪が黒く目つきの鋭い少年がいた。

恐らくあの御方が私の主なのだろう。

それにしてもいったい何が起きたのだろう。

「お姉さま、始めましてですぅ！　リインフォース・Ⅱ（ツヴァイ）と言いますですぅー！」

・・・とりあえず、私に妹はいない・・・・・・・・はずだ？

第1話（後書き）

アイン視点を書いてみた。

なんか微妙だな。

ちなみに夜天の書は管理局にアルカンシェルを撃たれて転生した直後となります。

第2話（前書き）

※3月25日　編集

第2話

ｓｉｄｅ　カイ

いろいろなことがあったが、なんとかヴォルケンズもアインもリインも落ち着いたので話を始める事にした。

「いろいろ聞きたいだろうから、質問があるなら受け付けよう」

いろいろと俺に聞きたいことがあるだろうな。でも答えたら不味いのもあるな。気をつけながら答えよう。

ヴォルケンズとアインはお互いの顔を見合わせ、そしてシグナムが俺に質問をしてきた。

「では幾つか質問させていただきます。まずは主の名前を伺いできますか？」

「名前か。俺の名前は黒葉カイだ。そういえば、俺もお前達の名前聞いてなかったな」

シグナム達の名前を聞いてなかったな。知らない名前を思わず呼びそうになりそうになることがあるだろうな。原作知識も考えモンだな、気をつけよう。

「も、申し訳ありません。私はヴォルケンリッター、剣の騎士シグナムと言います」

「わ、私は湖の騎士シャマルです」

「盾の守護獣ザフィーラです」

「・・・・・・鉄槌の騎士、ヴィータ」

「・・・・・・・・・・・・」

ん？　アインがモジモジしてる。そして、なんかすごく困った顔をしている。

う～ん・・・・・・・・ああ、そういえば。アインにはまだ名前が無いだったな。

俺はアインの方を向き。

「リインフォースだ。お前の名前は強く支えるもの、幸福の追い風、祝福のエール。リインフォース・Ⅰ（アイン）だ」

「え？　あの・・・」

「俺はお前のことをアインと呼ぶからな。わかったな？」

「あ・・・はい」

原作では名前はあげるのは重要なシーンだったんだけど・・・・俺の場合だしこんなもんか。

「じゃあ、他にはないのか？」

「では今、闇の書はどうゆう状態なのですか？」

やっぱり認識は闇の書なのか・・・まぁ、その内変わるかな。

「夜天の書の状態か。まぁ、とりあえずは全頁(ページ)埋めてあるぞ」

「そ、それは本当ですか！？」

「ああ、何なら確かめてみるか？」

俺はシグナムに夜天の書を手渡す。

シグナムは夜天の書を受け取ると、すぐに中身のチェックを始める。

周りのシャマル達も夜天の書を覗き込む。

「・・・・・全頁(ページ)埋まっている」

「れ、烈火の将、私にもよく見せてくれ！」

「・・・ああ」

シグナムはアインに夜天の書を渡す。アインは夜天の書を慌ててチェックしていく。

チェックしてる間、シャマルから質問がきた。

「あ、あの・・・闇の書が完成してるなら、私達はこれからどうすればいいんですか？」

これからか・・・とりあえず、原作までには・・・いや、なるべく早く魔法を覚えたいな。でもな・・・俺はミッドチルダ式の魔法を

中心にしたいからな。ベルカ式は接近戦が主だからな。まぁ、ベルカ式もやるけど、早急に覚えたいのはミッド式の覚えたいな。
魔法を教えてもらうにしても、仕事をやってもらうにしても今はまだ早いからな。

「・・・今は、特にないな」

「ないんですか・・・」

シャマルはそれを聞いてすごく落ち込んでいく。

もしかして夜天の書が完成したから自分達は捨てられるとでも思ってるのか。誰するか！　そんないろいろな意味でもったいないこと。

「安心しろ。お前達を捨てようなんて思ってない。それに衣食住くらい保障してやる」

「・・・え？」

シャマルはすごく意外そうな顔をした。

本当に捨てられると思ってたのか？　まぁ、闇の書になってからの主は大半が闇に捕らわれてひどいヤツばかりだったからか。

「でも、いくつか命令を聞いてもらうぞ」

「なんでしょうか？」

「ここから程近くにある麻帆良学園には絶対に、絶対に近づくな！」

ここはかなり強めに言う。そのせいか夜天の書のチェックをしていたアインもコッチの方を見た。

「わ、わかりました」

これはかなり重要だな。原作に係わる気あまりないからな。特に魔法世界編とか、マジで意味不明だしな。

まぁ、それに俺はハーレムにもあんまり興味がないしな・・・・ていうかあんな個性しか無いヤツ等でハーレムとか無理だろ。さばくのが不可能に近いと思うぞ。ハーレムやるなら従順な子がいいよな・・・・・やる気はないけど。

でもな・・・・オリ主ってよくわからないくらい巻き込まれるんだよな。

よし！　俺はがんばって原作を避けよ。

「ですが主、なぜその麻帆良学園とやらに近づいてはいけないのですか？」

「そこに魔法使いの本拠地があるからだ」

「魔法使いの本拠地・・・つまり時空管理局ですか？」

「いや、違う。関東魔法協会って言う、精霊魔法の使い手達の本拠地だ」

「精霊魔法ですか・・・」

やっぱり、ネギま！の精霊魔法は理解できないか。

「じゃあ、まずこの世界のことから説明する。よく聞けよ」

うまく説明しなくちゃな。ネギま！の世界とリリカルな世界の違い、そして魔法文化の違いをだな。

「まず、この世界は時空管理局の管理を遠く離れた世界だ。だから、この世界に管理局が出張ることは、おそらく無い」

たぶん時空管理局はいないよな。いるなら世界を無に期す魔法なんてほっとくわけ無いはないだろ。

「じゃあ、私達は管理局の心配はしなくていいんですか？」

「ああ、管理局のことは配する必要はないが、俺達はこの世界の魔法使い達に狙われるかもしれない」

「主、それはなぜですか？」

「狙われる理由は俺達の魔法にある」

「私達の魔法ですか・・・」

「この世界の魔法ってのは精霊を媒体として魔法を発動させるんだ」

「・・・さっきから精霊なんっているわけないだろう」

「ヴィ、ヴィータ！！」

「シグナムいいから、今は話を続けるぞ」

ヴィータと仲良くなるのは大変そうだな。原作では、はやてだからすぐに仲良くなれたんだと思う。俺は性格がそこまでよくないからな。個人主義者で若干、利己主義者だって言われてたもんな。

とりあえず、後でヴィータにはアイスを買ってやろう。

「俺達の狙われる一番の理由は次元転移魔法だな」

「・・・次元転移ですか」

「そうだ。この世界の魔法使いは最高位といわれる魔法使いですら次元を超えることなんて不可能だからな」

エヴァやフェイトでも距離はそこまですごくなかったしな。次元転移は本気で反則だよな。でもＳＳとかでも次元転移の評価は低いんだろう。アレは素晴らしくすごいと俺は思うんだがな。光速を越えて移動できるんだぞ。それでいてエネルギーの消費はそこまで莫大ではない。個人で使えるくらいだし。

それに宇宙空間移動できる戦艦。アレもすごいよな。アースラが宇宙空間にある時にクロノとかが無重力状態じゃなかった。ということは重力も操作可能ってことだよな。もしくは空間操作かな。どっちにしろ、マジで管理局って技術力が高いよな。

「そうなんですか」

「そうだ。だから次元転移や俺達の魔法を絶対にこの世界の魔法使

い達に知られたくないから、二つ目の命令は極力この世界の魔法使い達とは係わらないこと」

これはかなり重要だな。それにリリカルマジカルな魔法は威力が高いだよな。エヴァのえいえんのひょうがですら１５０フィート四方の空間を絶対零度で氷結させるだけ、あきらかにクロノのエターナルコフィンの方が範囲と威力は高いだろ。１５０フィートって４５ｍくらいだよな。それに比べてクロノのエターナルコフィンは水平線まで氷結させていた。つまり最低でも数？から数十？単位と考えていい。範囲と威力が違いすぎるよな。

それに俺の持ってるロストロギアのこともあるしな。ジュエルシードやレリックもヤバイけど一番ヤバイのはゆりかごだよな。ゆりかごはミッドチルダの二つの月の魔力を得れば時空管理局の海の戦艦数十隻にも勝てるほどなんだよな。ベルカの大地と複数の世界を消し飛ばしたんだけ。それでもＳｔｒｉｋｅｒＳの時代まで残っただよな・・・いったいどんな強度と耐久性してるんだよ。

魔法世界と戦争になったとしてもゆりかごだけで勝ってるな。それなら魔法世界の月にも莫大な魔力があるか調べるべきだよな。まぁ、戦争をする気はとりあえず無いけど・・・・・備えるくらいしないとな。

でも、なんで月には莫大な魔力があるんだろか、エヴァも月が出てるとパワーアップするし、月と魔力には深い関わりがあるのだろうか・・・・・今度、調査してみよう。

「最後になるべく俺の言うことになるべく従うこと。これは絶対じゃない。いやなら拒否しても構わない」

「あの・・・・それだけでしょうか」

「ああ、それだけだ」

「あ、あの主カイ」

「アイン、どうかしたか？」

「ぼ、防衛プログラムはどうなったんですか？　私がチェックした限りプログラム自体が消えたわけではないようなのですが・・・・」

どうする？

はっきり言って、夜天の書の状態を詳しくはまだ知らないのだ。あの爺曰く修正はされているはずだから大丈夫だとは思うのだが・・・・・・さてなんと言えばいい・・・・・

「大丈夫だ。防衛プログラムは二度と暴走はしない」

・・・たぶん。

自信満々に言っておいてなんだが内心ドキドキだった。どこかでボロがでてないよな・・・・？

「本当ですか？　本当に暴走はしないんですか？」

「・・・・ああ」

「・・・・・うぅ」

アインは俺の言葉を聞くとポロポロと泣き出したしまった。

「ほら、大丈夫だから」

俺はアインを抱き寄せて、しばらく抱きしめた。

「あ、あの主カイ。申し訳ありません。とんだ醜態をさらしてしまって・・・・」

「別に、そこまで気にしてはいない」

やはり・・・辛かったのか。当たり前か。何百年も破壊を続けるなんて俺には無理だよな。精神がもたなくなって終わりだな。

俺はそんなコイツ等の主になるんだよな・・・・ならコイツ等を守るのは俺の責任だよな。この世界からのどんなチカラとだって戦ってやろう。それが八神はやての代わりに夜天の王に俺の役目だな。

「さてと、とりあえずお前達の服でも買いに行くか」

「・・・服ですか？」

「お前達もいつまでも、その格好でいるわけにはいかないだろう」

今のシグナム達の格好は黒のワンピースとザフィーラはタンクトップ。これはあまりに恥ずかしいよな、世間的に・・・・

あ、それに今は2月だっけ・・・このまま外に出すのも不味いな。コートくらいクロゼットに入ってたかな・・・・

こうして俺のネギま！世界での生活が始まった。

おまけ

「ヴィータ、どうかしたのか？」

服を買いに来た俺達はデパートへとやってきた。

そしてヴィータはおもちゃ売り場の人形が並んでるところで足を止めて、ある一点を見つめていた。

「そのうさぎの人形が欲しいのか？」

ヴィータはなにも言わずコクっと一回首を振った。

「よし、わかった。買ってやるよ」

俺はうさぎの人形を一つ取り、レジへと向かい人形を購入した。

「ほら」

俺はヴィータに人形を渡す。

ヴィータは人形を受け取ると、とてもうれしそうに笑った。

その後も買い物でいろいろなことがあった。

「シグナムもシャマルもアインも下着くらい自分で選べーーー！！！」

シグナム達は自分で服を選ばず、大半俺が選んでやったり・・・・・・・

「リインとアギトの家・・・・これでいいか。ヴィータ、レジにこれもって行ってくれ」

リインとアギトの為に某人形メーカーのハウスセットを恥ずかしかったからヴィータに買いに行かせたりと、なかなか大変だった。

でも、まぁ、楽しかったかな。

第2話（後書き）

ネギま！の魔法ってリリカルの魔法に比べると威力と範囲に差がありますよね。

魔法少女リリカルなのはＴｈｅ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔのスターライトブレイカーを見て本当にそう思いました。あれは核なみにひでぇでもスターライトブレイカーってＡ’ｓでさらにパワーアップしてましたよね。

さらにはＡ’ｓにはトリプルブレイカーっていうのがありますよね。

映画第２弾のＡ’ｓも楽しみですね。

番外編～騎士甲冑～（前書き）

※3月31日　編集

はっきり言ってネタです。本編とはあまり関係ありません。読まなくても大丈夫です。

それでも読みたい言う方、どうぞ。

番外編～騎士甲冑～

ｓｉｄｅ　カイ

この世界に来て3日たった、ある日のこと。シグナムが俺にある頼みごとしてきた。

「・・・騎士甲冑を作って欲しいだと」

「はい。この世界でいつ戦いになるかわからないですので、できれば用意していただきたいのですが・・・・」

確かに・・・この世界で戦いを避けるのは難しい。なら用意するべきだよな。

「わかった、明日までに考えておく」

「よろしくお願いします」

さてと、騎士甲冑のデザインをどうするかな・・・・・原作と同じでもいいけど、やっぱり変えるか。

「カイ君～！　なに考え事してるんですか～？」

俺が騎士甲冑のデザインに考えてるとリインがやってきた。

「シグナム達の騎士甲冑を考えてる」

「おもしろそうですね～、リインも一緒に考えてもいいですか？」

ネタに走りそうな気もするけど・・・・・まぁ、いいか。

「別にいいぞ」

「やったですぅー！　頑張って考えるですよー」

こうして、俺はリインと二人で騎士甲冑のデザインを考えた。

次の日、リビングにシグナム達を集め、昨日考えた騎士甲冑のデザインを実際にシグナム達に着てもらう。

「さてと、まずはシグナムの騎士甲冑からだな」

「はい。よろしくお願いします」

「じゃあ、いくぞ」

夜天の書に騎士甲冑のデザインのイメージを送る。

『Ｉｃｈ　ｂｅｇｉｎｎｅ　Ｐｒｏｄｕｋｔｉｏｎ　ｄａｖｏｎ　ｒｉｔｔｅｒ　ｒ？ｓｔｕｎｇ．　（騎士甲冑の製作を開始します）』

そして例の変身シーンが始まる。

シグナムの服が消えて、騎士甲冑が精製される。その姿は赤いドレス、そのドレスの所々に鎧の用なついていて、手にも籠手が装備されている。

はっきり言おうセイバーを参考にしたと。ただしセイバーと言ってもエクストラのセイバー基本とし、そのままでは騎士ぽく無いのでセイバーリリィを合わせた物だ。

リインは神烈火織の堕天使コスにしようと言ったが、流石にストレートすぎて却下した。

「感じはどうだ？」

「はい。いい感じです」

シグナムは満足そうに微笑む。気に入ってもらえたようだ。

「じゃあ、次はシャマルだな」

「はい。お願いします」

俺は再び夜天の書に騎士甲冑のデザインのイメージを送る。

『Ｉｃｈ　ｂｅｇｉｎｎｅ　Ｐｒｏｄｕｋｔｉｏｎ　ｄａｖｏｎ　ｒｉｔｔｅｒ　ｒ？ｓｔｕｎｇ.　（騎士甲冑の製作を開始します）』

変身シーンが終わるとシャマルは白いビスチェに袴（はかま）風のスカートに花柄帯を巻いている。

うん、ＦＦ１０のユウナの服そのまんまだ。

これはリインのアイデアだった。金髪のシャマルに和風の服はどうかと思ったがなかなかよかったようだな。

「着心地はどうだ？」

「とてもいいですよ。それにかわいいですね～」

シャマルはくるりと回る、かなり気にいている様子だ。

「次にヴィータだな」

「おう、頼むぜ。カイ」

この3日でヴィータともだいぶ馴染めたようだ。

「じゃあ、いくぜ。ヴィータのはとっておきだ」

俺は夜天の書に騎士甲冑のデザインのイメージを送る。

『Ｉｃｈ　ｂｅｇｉｎｎｅ　Ｐｒｏｄｕｋｔｉｏｎ　ｄａｖｏｎ　ｒｉｔｔｅｒ　ｒ？ｓｔｕｎｇ.　（騎士甲冑の製作を開始します）』

変身シーンが終わるとヴィータはメイド服にネコ耳の帽子、さらにしっぽ、胸と耳の帽子の部分に大きな鈴が3つ付いた姿で現れた。

・・・・・完璧にでじこだな。ネタに走りました。

「な、なんなんだにょーー！！　この姿は・・・・」

「やふー！　完璧ですぅ～！　リインが完徹して設定を作った。語尾に『にょ』がついてしまう。ネコ耳帽子・・・・完璧ですぅーー！！」

「カイ、リイン、これはどういうことだにょ！？」

「なんかリインが面白いアイデアを思わずやってみた」

「ですぅー！」

「ですぅー、じゃないにょ！！　どうにかするにょ！？」

どうにか・・・・・もうちょっとこのままにしとくか。かわいいしな。

それにしても全国の人たちに見せたいくらいのかわいさだな。

「・・・ぷっ。に、似合っているぞ。ヴィータ・・・ぷぷっ」

「このにょー！！　シグナム、笑うんじゃないにょ！！」

「まあまあ、ヴィータちゃん。落ち着いて。それにかわいいんからいいじゃないかしら」

「シャマルも黙るにょ！！　・・・・・ってリインなにをやってるにょ！？」

「なにをってビデオ撮影ですけど・・・」

「いつからにょ！？」

「シグナムが変身したあたりからですけど・・・・・」

「なにっ！？」　「なんですって！？」

リインはどこからかカメラを取り出していて、今までのすべてを撮影していたらしい。

それを聞いたシグナム達も慌てだす、さすがにあの変身シーンの撮

影はさすがにいやだったらしい。

それにしても・・・・・あんなリインサイズのカメラなんてあったな。

「いいじゃないですかー、これもいい思い出ですよ～！」

「よくないにょ！！」「よくないぞ！！」「よくないですー！！」

相当に後世にあの変身シーンは残したくないらしい。まぁ、俺も残したくは無いから気持ちはわかるがな。

「きゃ～！　アギトちゃん、パスですぅー！」

ビデオカメラはリインからアギトへと渡る。

「ちょ、アタシを巻き込むなー！！」

「アギト、それを渡すにょー！」「アギト、それを渡せ」「アギトちゃん、それをコッチに渡しなさい」

「アギトちゃん。逃げてください。逃げなきゃ、アギトちゃんの寝顔をネットに流しますよ～」

「ちょっと待って！　いつの間にそんな物撮った！？」

「秘密ですぅ～。それよりも早く逃げた方がいいですよ」

シグナム達はじりじりとアギトとの距離を詰めていく。

「クソーーー！！」

アギトは逃げ出した。

シグナム達はアギトを追いかける。アギトは、その小さい身体をいかして必死に逃げる。

こうしてアギトとシグナム達との鬼ごっこが始まった。

「ふふふ、データは、すでに蒼天の書に送ってあるのでカメラが破壊されても問題ないですけどね～」

・・・悪魔だ。水色の悪魔がここにいた。

「アギト、待つにょーー！！！」　「アギト、待ってーー！！」

「アギトちゃん、待ちなさいーー！！」

結局、その後アギトはシグナム達に捕まった。そしてカメラも破壊された。でもそれは無意味なことなのだが・・・・・・

ことが終わった後、ヴィータがこの騎士甲冑は本気でいやだ言ったので変更することになった。

「カイ、今度はちゃんとしたのにしてくれよ」

「わかってるよ。じゃあ、いくぞ」

『Ｉｃｈ　ｂｅｇｉｎｎｅ　Ｐｒｏｄｕｋｔｉｏｎ　ｄａｖｏｎ　ｒｉｔｔｅｒ　ｒ？ｓｔｕｎｇ.　（騎士甲冑の製作を開始します）

『
変身シーンが終わるとヴィータは赤いドレス風のスカート、ジャケット、呪いのうさぎが付いた帽子。つまり原作のまんまだ。
本当は真紅の服装にしようかと思ったが止めた。ヴィータにはこの騎士甲冑が一番に似合ってると思うからだ。
「う～ん、これなら・・・まぁ、いいな」
ヴィータは自分の騎士甲冑をチャックすると納得してくれたようだ。
「じゃあ、これで終わりだな。お昼の準備でもするか」
「あ、あの主カイ。私のは・・・・」
「え？　アインの騎士甲冑は夜天の書に最初から登録してあるんじゃないのか？」
「いえ、別に変更することは可能なのですが・・・」
「・・・そうなのか」
ヤバイ、アインの騎士甲冑なんて考えてなかった。
あ～あ、目に見てわかるくらいに落ち込んでる。自分のを用意されてないと思っているな。
実際に用意はしてないんがけどな・・・・

考えろ、考えろ俺・・・・このままでは不味い。何か、何か無いのか？

俺はヴィータの方を見る。

そうだ！　真紅・・・・水銀燈だ！

はっきり言って水銀燈はまんまな気がするが気にしない。

「大丈夫だ。アインのも用意してある」

「・・・本当ですか？」

アインの表情は途端に明るくなる。

「ああ、本当だ。いくぞ」

俺は瞬時に水銀燈の服のイメージを少し変更した物を送る。

『Ｉｃｈ　ｂｅｇｉｎｎｅ　Ｐｒｏｄｕｋｔｉｏｎ　ｄａｖｏｎ　ｒｉｔｔｅｒ　ｒ？ｓｔｕｎｇ.　（騎士甲冑の製作を開始します）』

変身シーンが終わるとアインは水銀燈の黒いドレス、特徴的な逆十字の部分は夜天の書の十字架と同じものに変更されている。ちなみにヘッドドレスは付けていない。

「ふぅ、着た感じはどうだ？」

「はい、とってもいいです」

はっきり言って適当に作ったのだが、アインにも満足してもらえたようだ。

「そうか。それはよかった。じゃあ、これで全員に騎士甲冑の製作は終わったな」

「はい。そのはずです」

「なぁ、カイ。お昼、なに作るんだ？」

「いい鶏肉を買えたから親子丼となんかにしようと思ってる」

本当にいい鶏肉が買えた。いい鶏肉とはブロイラーなどではなく放し飼いにされていた物を買うことができたのだ。

「親子丼か・・・・カイ、アタシのは大盛りな！」

「ああ、わかったよ」

「あ、あのある「あ、カイ君。私も手伝いますよ」・・・」

「それじゃあ・・・シャマルは玉ねぎを切ってくれ」

「わかりました」

こうして俺は親子丼を作り始めた。

そしてザフィーラの騎士甲冑のことを思い出したのは食後のことだった。今までザフィーラは狼の姿でいたのですっかり忘れていたのだ。

ちなみにザフィーラの騎士甲冑も原作と同じ物になった。

別に、考えるのがめんどくさくなったわけじゃないからな！　ザフィーラにはあの騎士甲冑が一番似合ってると思うからアレにしたんだ。

・・・・・本当だぞ。

番外編～騎士甲冑～（後書き）

次回は本編をあげます。

第3話（前書き）

復活しました！

待っていて頂いた方々、感想をくれた方々、本当に有難う御座います！！

いつのまにかＰＶが１０万、ユニークが３万を超えていて本当に感謝です！

復活が遅れた理由は他の小説を書いてみたり、パソコンが壊れたりといろいろとトラブルなんかあり復活が遅れてしまい大変申し訳ありません。

こんな駄文ですがよろしくお願いします。

第3話

ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

今、わたしは夜天の王、カイとかいうヤツとその従者たちをつれて家に向かって歩いている。聞きたいことがたくさんあるからな！！！

・・・さっきの戦闘のわたしには信じられないものばかりだった。ポニーテールの剣士、ヤツの剣術はおそらく詠春と互角、いや・・・・それ以上か・・・あと、あの赤髪のガキもかなりできたな・・・。

まぁ、それはいい。それよりもカイ？　とかいうヤツが最後にはなった砲撃だ！

ヤツらのはなしでは６キロ先に召喚者いたそうだが、それを正確に打ち抜いたというのか！！　どんな魔法だ！！　闇の吹雪でも６キロ先のヤツに正確に当てれるかわからんぞ！！！

そのあとのこともそうだ！！「ユニゾン・アウト」とか言ってカイいうヤツとポニーテール剣士が分裂？　して銀髪の女と小悪魔の妖精？が現れたんだ！！

信じられるか！！！分裂ってなんだ！！！

・・・・と着いたか

「着いたぞ」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅカイ

「着いたぞ」

来ました！　エヴァハウス！！

「お帰りなさいませ、マスター。お客様ですか？」

茶々丸かな・・・・

「一応な・・・」

「では、お茶をご用意します」

「そうしろ」

茶々丸が奥へ行った。

（みんな説明はおれがするから）

みんなに思念通話をする。

（（（（（（（（了解しました（おう）（わかったぜ）（わかりました）））））））

エヴァジェリンがソファーに座る。

「では、説明してもらうぞ」

「その前に名前教えてもらえるか？」

聞いてなかったし・・・

「そう・・だったな・・・・真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。さっきのヤツはわたしの徒者の茶々丸だ」

自分で吸血鬼って・・・・。

「そうか・・・おれは夜天の書の主にして夜天の王の黒葉カイでこいつらは・・・」

「ヴォルケンリッター剣の騎士、シグナムだ」

「ヴォルケンリッター湖の騎士、シャマルです」

「ヴォルケンリッター盾の守護獣、ザフィーラだ」

「夜天の書の管制人格、リインフォースⅠだ」

「リインフォースⅠですぅ～、リインと呼んでくださいですぅ～」

「烈火の剣精のアギトだ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

ん？ヴィータどうしたんだ？

「ヴィータ？」

「ヴィータちゃん？」

「・・・・鉄槌の騎士　ヴィータ」

エヴァンジェリンとなにかあったか？

まぁ、あとで聞くか。

「それじゃ、説明するぞ。まず、おれたちは異世界からきた」

「なにぃ～～、異世界だと。わたしをバカにしてるのか！！」

「じゃあ、さっきの魔法どう説明するんだ？この世界にあんな魔法あるか？」

「ぐっ・・・たしかにあんな魔法はないな。魔法陣も見たことないが・・・・・。ではあの魔法はどうやってるんだ？詠唱もなしあのレベルの魔法をどうやっている？」

う～ん、教えて大丈夫かな？

まぁ、大丈夫か。魔法界に言わないでくれれば。

「おれたちの魔法は簡単に言うと科学だ！」

「科学？」

「そうだな～、さっきの茶々丸さんロボットだろ？」

なんだシグナムたち、マジ？って感じの顔は？

・・・気づかなかったのか？

「そうだが・・・それがどうした？何の関係ある？」

「茶々丸さんからは魔力を感じるんだよね。おれの予想だけど魔法技術が組み込まれている」

「そのとうりだが・・・・なんだ！さっきから何の関係がある！！！」

怒らないでよ（汗）わかりやすくやろうとしてるんだから。

そしてみんなそんなに殺気をたてるな・・・・思念通話するか。

（みんな落ち着け！）

（しかし、主・・・このもの失礼です）

（いいから、落ち着いて、アイン）

（・・・・わかりました）

はぁ～、殺気が治まったな。

「おれたちも同じなんだ」

「なに？　どういうことだ？」

「おれたちの魔法も科学との融合ってことだ」

「詳しく説明しろ！」

ーカイ説明中ー

「つまり、貴様らの魔法はデバイスという補助道具を使い。それに魔法プログラムを保存しておいて使用するということか？」

「そうだよ。まぁ、デバイスを使わない人もいるけどね」

ユーノとかリンディさんも使ってなかったよな。

「なんだ、デバイスなしでも使用できるのか？　どういうことだ？」

「う～ん、それは君たちの魔法とおれたちが使う魔法の考え方が違うからかな」

「どういう意味だ？」

「わかりやすく言うと・・・君たちの魔法はファンタジーなもので精霊とかそういう類のものでしょ」

ネギま！の魔法はまさに“魔法”って感じだ。それに比べてリリカルなのはは、科学魔法って感じだな。

「まぁ、そうだな」

「おれたちの使う魔法とは、自然摂理や物理作用をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり消去したりすることで、作用に変える技法に魔力を使うから魔法というだけだからね」

「たしかになぁ・・・・まったく違う考え方だな」

エヴァンジェリンが少し感心した感じでうなずく。

「そぉ、だからデバイスは補助に過ぎないから魔力をもってれば君たちでも使用できる」

「私でも使えるのか？」

興味があるのかな？

まぁ、あたり前か。６００年生きた吸血鬼だからな。自分の知らない魔法には興味があるだろうーな。

「できるよ。まぁ、術式を教えればね。でも・・・決して君たちだけでは使うことはできないよ。おれたちの魔法はね」

本当に考え方が違うからな。おれたちが教えようとしない限りこの世界の人は、ミッドチルダ式もベルカ式も使えないだろうな。

それに古代ベルカ式はレアスキルみたいな部分もあるから、シグナ

ムたちの魔法を見られても真似することはできないけどな。まあ、見せないにこしたことはないけど・・・・。

「マスター、お茶をお持ちしました」

茶々丸ちゃんが紅茶をもってきた。

「む、ご苦労」

「みなさまもどうぞ」

「ありがとう」

少し飲んでみよう。う～む、うまいな。さすがだ。

みんなも飲んでいる。

「そういえば、お前たち途中で魔力が上がったな。あれは何だ？」

カートリッジシステムのことかな？

「カートリッジシステムのことかい？」

「カートリッジシステム？？」

「じゃあ、また説明するよ」

ーカイ説明中ー

「ふふふ・・・なるほどな。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る。・・・・・使えるな」

魔力が封印されてるからな。

「よし！　私にもおまえたちの魔法を教えろ！！」

まぁ、魔法世界や協会に言わなければいいけど。

う～ん、どうしようかな・・・

「条件がある」

「フン、いいだろう言ってみろ」

「一つ目は、君のデバイスとかを作るために機材が必要だからそれを提供して欲しい」

リインによるとデバイスの作成は機材があれば可能だそうだ。さすがｓｔｓのときＦＷ陣のデバイスの作成に関わってただけあるな。

これで整備なんかもできるな。

魔法データも夜天の書にあるし、デバイスのデータもシュバルトクロイツがあるもんな。

「いいだろう。それくらいならかまわない」

「二つ目は、おれたちの魔法の詳細と魔法データをほかの人に絶対にばらさないこと。君の知り合いにもだ」

これは魔法世界と協会に対する一応の保険だ。あと超鈴音にもおれたちの魔法データをやりたくないからな。もしやったら原作にずれが生じるだろうからな。

「なんだ、知られたくないのか？」

「まぁな、魔法世界と協会におれ達の魔法をあまり教えたくないからね」

「ん？確かにお前達の魔法はすごいが・・・・そこまで知られたくないのか？」

知られたくない。というかあまり教えてはいけない魔法はある。

まず転移魔法。これはあまりというか、絶対に教えたくない。次元を超える転移魔法・・・・、教えてもろくな事にならない。これを教えると魔法世界と地球の移動が簡単になってしまう。それこそ多

くの魔法使い達が地球に来てしまう。その中には絶対に犯罪者も入ってしまうだろう。その犯罪者達を協会のヤツ等が魔法を隠しながらすべて捕まえられるかというと答えはＮＯだ。コレは本当に教えてはならない魔法だ。

あとは、空間に干渉する魔法だな。リンディさんが使ってたディストーションシールドとかだな。あの魔法は空間に特殊な歪みを生じさせて次元震を止めたんだっけ・・・。まぁ、高ランクじゃなきゃ使えないんだけどね。とにかく空間に干渉する魔法も教えたくない。教えてしまうと下手したら次元震を引き起こしてしまうかもしらないし・・・。魔力に関しても世界樹のような触媒があれば本当に次元震が起きる。

あれ？　おれ達ってこの世界にとって結構な重要な人物になった？

簡単に魔法を教えるのは絶対にやめよう！！エヴァは・・・・ま、いっか。

う～ん、とりあえず結界魔法を使っておれ達の魔法とエヴァ達の魔法の違いを実演してみるか。

「まぁ、じゃあ実演するよ。シュバルトクロイツ、封鎖領域を展開」

『ｊａ．Ｇｅｆ？ｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ』

封鎖領域を展開する。

「な！？　おまえなにをした？」

「空間を切り取った。この結界さっきも使ってたんだけど」

「な、なに！？　空間を切り取っただと」

「確かに別の空間のようですね」

茶々丸が解析してるみたいだ。

「いや、だが私達も似たようなものを使えるから凄いわけじゃないぞ」

ああ、確かにフェイトの仲間が使ってたっけ。

「重要なのはそこじゃないだ。問題はこの魔法が使える少し優秀な魔導師ならだれでも使用できるということなんだ。それに比べて君達はどうだいこれほどの結界を何人作り出せることができるかな？」

「まぁ、確かに・・・・たった一人でこのクラスの結界を使えるものは世界中に１０人いるかいないかといった所か」

エヴァが答える。

「つまり君達とおれ達の魔法にはかなりの差がある。そしておれ達の魔法・・・特にミッド式魔法は凡庸性がとても高いからね。というわけであまり広めたくないんだよね」

でも、まぁ差があるって言ったけどネギま！の中にもすごい魔法もあるけど。悪いけど威力と便利さはリリなの魔法のほうが上かな。千の雷とおれの破壊の雷のどっちが威力が上かなんて日を見るより明らかだからな。

「まぁ、わかった。言い広めたりしない」

「ありがとう。あと、茶々丸さん。君の製作者にもにも黙っていてくれないか？」

「葉加瀬にもですか？」

「できれば頼む」

「わかりました。皆様方のデータはすべて葉加瀬が観覧できないようにします」

「最後は、此処の責任者に会うときにおれたちに便宜を図ってくれ」

これはぬらりひょんに利用されないための一応の保険だ。本当は別荘の使用許可も欲しいけど・・・この時点で別荘のことを知ってるのは変だからな。

「最後がそれでいいのか？」

「ああ」

「いいだろう。それくらいは呑もう」

まぁ、エヴァジェリンにやってもらえるのはこれくらいだろう。

「じゃあ、魔法を教えるのはデバイスができてからでいいか？」

「いいだろう。・・・ふふふ・・・・・それにしてもカイ。おまえとはよき友になれそうだな。わたしのことはエヴァと呼べ！！！」

「・・・あ、ああ」

あれぇ～、変なフラグがたった？

しばらく細かいことを話してると・・・・・

「そういえば思い出したぞ！」

な、なにを？

「おまえたちが分裂したことについてだ！！！」

ぶ、分裂・・・・・ユニゾンのことかな。

「ユニゾンのこと？」

「カイ、ユニゾンとは何だ？」

「わかった、説明する」

ーカイ説明中ー

「なにぃぃ～～～～！！　コイツ等、３人がさっき言ってたデバイスだと～～～！　カイ、本当か？」

「そうだけど」

「その妖精もどきならまだわかるが・・・・その銀髪の女もか？」

「そうだ。アイン、リイン、アギトはユニゾンデバイスと呼ばれるデバイスだよ」

「本当か！？　人間にしか見えないではないか！！」

本当に人間にしか見えないよね。

でも、それくらいで驚いてたらヴォルケンリッターがプログラムだって知ったらどうなるだろう・・・・・・・

「ちなみにわたしたち、ヴォルケンリッターはプログラムですよ」

ちょ、シャマル。爆弾を投下するな。

「な、なにぃぃぃぃ～～～～～～～！！？」

ーエヴァ混乱中ー

「エヴァ、大丈夫かい？」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・、ああ、大丈夫だが・・・しかし本当か？・・コイツ等がプログラムというのは？・・・貴様らの世界はそこまで進んでいたのか？」

「そういうわけじゃない」

ミッドチルダの科学はは確かに進んではいたけど、よくて地球から１００年先にいくくらいかな？・・・たぶん

「どういうことだ？？」

「この夜天の書がロストロギアだからさ・・・」

「ロストロギア？？」

「ロストロギアっていうのは、過去に滅んだ超高度文明から流出するマジックアイテムや魔法、魔導書などの総称さ・・・・・。それらは世界を滅ぼすほどの力を持ている」

「！？　世界を滅ぼすだと！・・・・・そんなことが可能なわけあるか！！」

「うそじゃない。事実におれたちの世界で滅んだ世界があった」

旧暦４６２年にある世界で次元断層発生して、周囲の次元世界も巻

き込み歴史に残る惨劇が起きただけ？

「・・・では、おまえたちの世界も滅んだのからこちらに来たのか？」

「そういわけではないよ、おれたちの世界は滅んでいないよ」

ミッドチルダは滅んでない。まあ、古代ベルカのあった世界は滅んでいるけど・・・。

「なにぃ！！　一体どういことだ！？」

「う～ん。世界っていうのはねぇ、次元の海できているだよ。エヴァもこの地球と魔法世界、二つの世界を知っているだろ。本当はそれだけじゃない。世界っていうのはそれこそ星の数ほどあるんだ」

魔法世界なんてものがあるんだから他の世界もあるだろう・・・・・・たぶん。・・・いやきっとある！

「な、ななな・・・・じ、次元の海だと？・・・・そんなものが・・・・、世界が星の数ほどに存在するだと・・・・いや、事実コイツ等が別の世界の人間ということは間違いないが・・・いやしかし・・ブツブツ、ブツブツ」

あれぇ～？　説明間違ったかな？

「お～い、エヴァさ～ん」

「ッ！？　すまなかったな。そういえば、おまえの夜天の書だったか？　それも世界を滅ぼすほどの力をもっているのか？」

う～ん、実際どうなんだろうな。闇の書だったから最上級のロストロギアってことだったからな。

「アイン、どうなの？」

「そうですねぇ・・・。主ほどの魔力があるなら、私とユニゾンして古代ベルカの上位魔法か儀式魔法を使用すれば中規模の次元震くらいなら起こせるかもしれませんね」

次元震か・・・ということはやり方によっちゃあ世界を滅ぼせるかもてことか。

・・・・あれ？　おれってアスナなみに危険人物なの？

「あ、あはは・・・。ま、まあ、この学園を一撃で滅ぼせるって思ってくれていいよ」

や、やべ。じゃあ、デアボリック・エミッションやら破壊の雷やらを全力全開で打てないことかよ。・・・・ちくせう。

「「・・・・・・」」

あ、エヴァと茶々丸さんがなんか危険人物を見るような目で見てるよ。おれ、そこまで危険人物じゃないからね・・・・。お、お願いだからそんな目で見ないでぇぇぇ～～～～。

side out

side エヴァ

世界を滅ぼすだと・・・、そんなことは全盛期の私はおろかサウザンドマスターでさえ不可能だ。それも一個人で行えるとは・・・・危険だな。

さっき言っていた次元震とういうのはおそらく次元単位の地震といったところか・・・。

いや、だがよく考えろ！ヤツ（カイ）の血を飲めば私の呪いも解けるかもしれないな・・・・・・・しかし問題は飲ませてもらえるかということだな。襲って飲もうとすれば周りの騎士たちに返り討ちにされるのが関の山だしな。というか封印なしでもコイツ等全員相手にしたら勝てる気しないぞ。

総合的にみても赤き翼に負けていない。前衛に剣の騎士に鉄槌の騎士の二人。この二人がいれば前衛はこと足りるな。湖の騎士と名のった女、ヤツはおそらく回復とサポートの能力が高いとみた、実際に回復魔法を受けたのでその回復魔法については私が知っている。盾の守護獣といった犬？盾の名から防御が高いのだろう。さらに人外の魔力をもつ夜天の王。魔法使いの砲台としての役割を確実にこなすだろうな。それらにさらに力を与えるユニゾン・デバイスたち・・・・・。

・・・・・あれ？完璧な布陣ではないか・・・・・。バランス的には赤き翼よりよくないかコレ・・・アイツ等（赤き翼）は結構デコボコだったし。それにまだヤツ等（カイ達）が本気とは思えないしな。

・・・・・・・・・うむ（汗）やはり当初の予定どうり友好関係を築くのが一番か。ジジィを出し抜けるしデメリットよりメリットのほうが多いな。それにヤツ等の魔法のなかに私の呪いを解くヒントがあるかもしれないしな。

それにカイは魔法世界と魔術協会についてある程度の知識はもっているだったし、頭も悪いわけではなさそうだしな。

・・・・・・・だが、欲を言えばもう少し実力が知りたいな・・・・・。よし、アレを出すか！

あそこなら私もある程度の実力は出せるからな。

「少し待ってろ」

そう言って私は地下へと行った。

side　out

ｓｉｄｅ　カイ

「少し待ってろ」

そう言ってエヴァは地下へ行った。

う～ん、これは別荘でも探しに行ったか？

あ！そういえば重要なことを聞いてなかった。

「茶々丸さん。今日は西暦何月何日でしょうか？」

「今日ですか？今日は２００２年７月２０日です」

「ということは夏休みですか？」

「はい、そうです。夏休みの初日です」

ご都合主義だな。てことはおれが２－Ａ入るとしたら、それにはかなりの時間があるってことか・・・。

いろいろやりたいことがあるしちょうどいいな。

そういえば戸籍どうしようかな？リインに頼んでハッキングしてもらうか。できるか？　まあ聞いてみるか。

「リイン」

「はい！　なんですかぁ～？」

「この世界のパソコンを使っておれたちの戸籍って作れないか？」

「そんなの楽勝ですよ～。やろうと思えばＮＡＳＡのコンピューターにもハッキングできるですよ～」

さすがリインだな。

「茶々丸さん。パソコンありますか？」

「はい、ありますよ。どうするんですが？」

「ちょっと、ハッキングして戸籍を作ろうかと」

「大丈夫ですか？　普通のパソコンですよ」

「大丈夫ですよ～。むしろいいハンデです！やってやるですよ～～！！！　ここで日本を掌握してやるですぅ～～～！！」

リイン目的変わってるよ。いいけど。

「そうですか。では、こちらです」

リインがふわふわと茶々丸について行く。

そういえばリインのヤツ、あのままでパソコン使えるのか？

まあ、いいや。リインならどうにかするだろう。

ー１０分後ー

「ふ～、疲れたな。ん?、茶々丸はどこだ?」

「はい、ここにいます」

「リインさんがパソコンを使いたかったそうなので」

「うん、そうか」

「リイン、リイン」

「はいですぅ!」

「できたか?」

「余裕でできたですよぉ～」

「そうか、よくやったな」

１０分で、できるものなのか?

リインもチートくさいな。

「では、お前たちついて来い」

そう行ってエヴァは地下へと行った。

それにおれたちも続いて行く。

第3話（後書き）

今回はリリなのとネギま！の魔法の違いを書いてみようとしたんですが、説明があんまりうまく書けた気がしませんでしたね。

こんな感じですがこれからもよろしくお願いします！

第４話（前書き）

投稿が遅くなってすいません！！

今回も独自解釈が満載です！

それでもいいという方のみ読んでください。

第４話

ｓｉｄｅ　カイ

え～と、今現在エヴァの別荘にいます。

海がきれいです。砂浜まであります。すごくほしいです。

シグナムたちもコレにはびっくりのようです。

「ふふん♪どうだ、すごいだろう。おまえ達の世界でもこんなものなかっただろう。ここは私の別荘でな、一日過ごしてしても外では一時間しか経過しないという優れものなんだぞ」

エヴァが上機嫌です。

「すごいですぅ～」

「すげなー」

「ほんとうにすごいわね～」

「ああ、これはさすがに驚きだ」

「そうだな」

「ああ、こんなものは私も見たことがない」

上からリイン、アギト、シャマル、シグナム、ザフィーラ、アイン

だ。

あれ？ヴィータの反応がないな。

「ヴィータ、どうかしたのか？」

「な、なんでもねぇよ。うん、なんでもねぇ」

う～ん。本当にどうしたんだ？こういうとき一番驚きそうなのヴィータなのに・・・。

まあ、いいか。

「で、ここにつれて来て・・・・何するんだ？」

予想はつくけど・・・。

「ふふふ・・・・私と戦ってもらう」

はい、予想どうりですね。

「一対一かい、それとも徒者ありでかい？」

「一対一で戦ってもらう」

そうだよな。徒者ありでならおれが有利だからな。

「誰でもいいのか？」

「フン、別に誰でもかまわん」

「主、主。私がやります」

シグナム・・・・早速バトルマニア発動かよ。

「まって、シグナム。あたしがやる」

「なんだ、ヴィータ。おまえもさっきの戦いだけではたりないのか？」

「そんなんじゃねぇよ。・・・でもコイツはあたしがブッ飛ばす」

そう言ってアイゼンをエヴァにむける。

「ふむ・・・・・・わかった。ではヴィータ、おまえにまかせよう。主の前で負けるなよ」

「あたり前だ！。それにベルカの騎士に一対一で・・・」

「負けはない・・・だな」

「ってことで、あたしが相手だ！」

「フン、ではついてこい」

そう言って闘技場へエヴァとヴィータがむかう。

「なぁ、シグナム。ヴィータはなんでエヴァに絡むんだ？」

「さぁ、私にもわかりませんがあのものと何かあったのではないで

しょうか」

やっぱり、先に行かせたときに何かあったのか？

エターナルロリータ同士仲良くしてほしいだけどな・・・。

おっと、始まるみたいだな。やっぱりエヴァは魔力が封印されているしヴィータ有利かな？

そういえばここって外より魔力が濃いだっけ、ここでスターライトブレイカー打ったらどうなるんだろう。そんなこと考えてる場合じゃないなヴィータの応援しよう。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　エヴァ

「では、始めるぞ」

「さっさとしろ！！このチビ！！！」

「チ、チビ・・・だと・・貴様だってチビではないか・・・ふふふ・・・いいだろでは始めてやるリク・ラク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！氷の精霊２７頭集い来たりて敵を切り裂け！　魔法の射手連弾・氷の２７矢！！」

氷の２７矢が赤髪のガキに向かっていくが、なぜかヤツは動かない。

よける気がないのか？

「アイゼン！！パンツァーガイストだ！！」

『Ｊａｗｏｈｌ！Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ！！』

そう言うとヤツが魔力光で包まれる。そして私の魔法の射手があたる。

＜ドカーーーン＞

けむりがはれるとそこには・・・・。

「この程度かよ！」

無傷のヤツがそこにいた。

「な！！む、無傷だと・・・・」

いくらなんでも無傷はないだろ。それほどダメージを期待していたわけではないが・・・。

「じゃあ、今度こっちからいくぜ！！アイゼン！！」

『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ』

銀弾が精製され私に向かってくる。

「ッ、氷盾」

私は銀弾を氷盾で防ぐ。

「コッチだ！！テートリヒ・シュラーク！」

いつの間にかヤツが私の後ろに回っていた。そして私にハンマー振り下ろした。

「ッ！？」

私は吹き飛ばされた。

つねにはってある魔法障壁のおかげで威力を弱めることはできたがなんて威力だ。かなりのダメージを受けたぞ。

私は立ち上がり次の詠唱を始めた。

「クソ、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来れ氷精　大地に満ちよ　白夜の国の凍土と氷河をこおる大地！！！」

ヤツにめがけてこおる大地を放つ。

「こんなの当たるか！！」

『Ｐｆｅｒｄｅ』

だがヤツは私のこおる大地を簡単にかわしてしまう。

ク、空まで飛べるのか。スピードはヤツが圧倒的に上だな。早すぎるぞ、だが見切れないほどではないが・・・・。防御もかなり高かった。ではどうする・・・・・・。

糸で動きを封じて最大の闇の吹雪ぶつける。いまはこれしかないか。クソ！！忌々しい呪いめ。

まずは接近してヤツの周りに糸をはるか・・・・。

「なんだ、あたしに接近戦で勝てると思ってるのかよ！！」

「ふふ、勝てるなんておもっちゃいないさ」

私はヤツにきづかれない様に周りに魔力をこめた糸を張る。それと同時にヤツと何とか合気道を駆使して接近戦を行う。コレがすごくきつい。

そして糸を張り終えた。

「なにぃ！！！う、動けねぇ」

「ふはははは、どうだ動けまい。魔力こめた糸だ！！」

私は少し後ろにさがり詠唱を始める。

「ふふふ、そしてくらえ！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック
来れ氷精　闇の精！！　闇を従え　吹雪け　常夜の氷雪」

ヤツはなんとか抜け出そうとするがかなりの魔力をこめたんだそうそう抜け出されてたまるか！！

「く、くそぉぉぉーーー！！！」

「ふはははは、くらうがいい。闇の吹雪！！！」

闇の吹雪が当たろうとする瞬間・・・。

『Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ』

ヤツの足元に魔法陣があらわれって、ヤツの前に盾があらわれる。

「なにぃ！！！クソーーー、突き破れーーーーー！！」

＜ドカーーーーン＞

クソ、どうなった。どれくらいダメージを食らわせることができた。

魔力の残りは・・・少しか。それにしてもあのタイミングで盾だと。

「へへ、助かったぜ・・アイゼン。それにしてもきいたぜ！！」

「な・・なに！？」

そこには服に少し汚れがついたもののまだまだ余裕そうなヤツが立っていた。

「それじゃあ、今度はコッチが本気だすぜ！！吼えろ！グラーフアイゼン！！」

『Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ』

ヤツのハンマーの形が変わりさらに・・・・。

「まだだ、カートリッジ！！」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』

ハンマーが数十倍にまで巨大化した。

「いくぜぇ！！！轟・天・爆・砕！！」

目の前に迫って来る巨大なハンマー。

・・・どうする、避ける。・・・否、不可能だ。でか過ぎて避けきれない。

だったら障壁を張る。防ぎきれるか？

いや、もう避けれないんだ。残りのすべての魔力を盾にまわす！！

「氷盾！！！」

「ギガントォ・シュラークゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

＜ドカーーーーン＞

わずかに私の氷盾がハンマーを防ぐ。だがすぐに・・・・・・

＜パリィィィン＞

私の氷盾やぶれて、私はそのあとすぐに意識を失った。

side　out

ｓｉｄｅカイ

おいおい、ヴィータ。いくらなんでもギガント・シュラークはやりすぎだろ。

生きてるよねエヴァ。まあ、非殺傷設定だし。大丈夫だよね？

あれ？　でも、そういえばベルカ式って非殺出来ないっぽいことをシグナムが言っていたような・・・・これってやばい？？

「マ、マスターーーーーーー！！！」

茶々丸ちゃんがエヴァのところに向かって飛んで行く。

「おい、みんな。おれ達も行くぞ」

「「「「「「はい（おう）」」」」」」

おれ達もエヴァ達のところへ向かう。

え～と、今シャマルがエヴァを治療中です。怪我はそれほどひどくはないようです。

ふう、本当によかった。ここでエヴァ死亡したら本気で洒落にならなかったぜ。

でもさっきまで茶々丸さんはおろおろしてました。

ちなみにヴィータは反省中。さすがにギガント・シュラークはやりすぎとシャマルに叱られてました。

とりあえずおれもエヴァの様子をみにいくか。

「シャマル。エヴァの様子どう？」

「あ、はい。怪我はもう大丈夫ですよ。でもこの子・・・少し変なんですよ」

「変？何が？」

「え～と、この子のリンカーコアなんですけど・・・普通と少し違うというか・・・何というかですねぇ・・・・」

「リンカーコア？」

ていうかこの世界もリンカーコアなんですか。まぁ、可笑しいことではないけど。

「この子の総魔力量は軽くみてもオーバーSくらいあるんですけど・・・・」

「けど？」

「この子は大気中の魔力をうまく取り込めていないんです。普通は蓄積されるはずの魔力が蓄積されない。こんなこと普通じゃありえませんから」

うわ、どう考えても呪いですね。

「治療はできそうか？」

「わかりませんね。こんな症状は始めてですし・・・・。くわしく調べればなにかわかるかもしれませんが・・・・。それには・・・機材もありませんしね」

「そうか・・・・」

う～ん。呪いか・・・どうにかしてやりたいけど・・・・。とりあえず今は保留だな。

「・・・うぅぅ」

「あ、目が覚めたみたいですよ」

「エヴァ。大丈夫か？」

「私はどうなったんだ？」

「ヴィータのギガント・シュラークをうけて気絶したんだ」

「怪我のほうは私が治したので、もう大丈夫ですよ」

「そうか・・・・茶々丸はどうした？」

「いちおう薬を取ってくるそうです」

「そうか・・・・」

「ほーらぁ、ヴィータちゃん。いくですよぉ！！」

ん？

「リイン！！押すじゃねぇよ！」

ヴィータにリイン。あいつ等・・・何してるんだ？

リインがヴィータの背中を押してる。

「もう！！いいから、謝ってくるですぅ！」

＜ドン＞

「うわぁ！！」

「「・・・・・・・」」

見つめ合うヴィータとエヴァ。

「ヴィータちゃん！！はやく言うですぅ！」

「えーと・・・その・・・わりぃ。さすがにやりすぎた」

「フン、別に気にしちゃいないさ。・・・それにもともと私から申し込んだんだ」

「「・・・・・・」」

再び見つめ合う二人。

「もう！！！さっさと仲直りするですぅ！！白い悪魔と金色の死神も全力全開で戦ったあと仲良くなったですぅ！！そうだ！名前を呼ぶですぅ！そうすれば仲良くなれること間違いなしですぅ！さらにリボンの交換をすれば親友になれること間違いなしですぅー」

リインの勢いにおされる二人。

なんでだろう？今リインの後ろに一瞬だけど白い悪魔が見えたのは・・・・。

「わ、わかったよ。リイン」

少し黙って・・・・。

「エ、エヴァンジェリン」

「・・・・・・エヴァでいい」

「え？」

「エヴァでいいといっているのだ。・・・・・・ヴィータ、ラテン語で生命だったか。いい名前ではないか」

「あ、ああ。ありがとう」

「うん、うん。よかったですぅ」

リイン、よくやった。グッジョブ！おれはリインにむけて親指を立てる。

リインもサムズアップして親指を立てる。

そこにちょうどいいタイミングで・・・・。

「ああ、マスターとても楽しそうに・・・・」

「ちゃ、茶々丸！？・・・お、おまえいつからいた？」

「リインさんがヴィータさんを押したあたりからです」

「なぜすぐに入って来なかった？」

「記録の必要性を感じたからです」

「ということはいままで・・・・」

「はい、録画してました」

「ッ！？クソーーーー！！！すぐに消せ！！巻いてやる！！」

「あぁ！そんなにネジを巻いては・・・」

エヴァがネジを巻く一方で・・・・。

「くすくす」

「ッ！？シャマル！なに笑ってやがる！！」

「べ、別に笑ってないわよ・・・くすくす」

「くっ、このぉぉーーー！！」

ヴィータはアイゼンを起動させる。

「ちょ、ヴィータちゃん。なにアイゼン起動させてるのよ！」

「おまえをぶっ叩くためだーーーー！！」

「いやーーーーー！！！」

アイゼンをもってシャマルを追い回すヴィータ。

え～、なにこのカオス。

ー３０分後ー

さっきのカオスが終了し、現在は茶々丸さんの用意したご飯を食べています。

そしてシャマルがあのことエヴァに質問する。

「あの～、少し聞きたいことがあるんですけど・・・いいでしょうか？　マクダウェルさん」

「ん？　なんだ？」

「貴方のリンカーコアが大気中の魔力をうまく蓄積できていないみたいなんですけど・・・なにか心当たりはありませんか？」

「ちょっとまて・・・そのリンカーコアとはなんだ？」

「あれ？　カイ君が説明してませんでしたけ？？」

した覚えはおれにはないぞ。

「してないよ」

「あ、そうなんですか。じゃあ、説明しますね」

「ああ。わかった。だがその前にこれをかけろ。気分が出る。カイは似合いそうになかったが、お前は似合いそうだ」

そう言うとエヴァはどこからかメガネを取り出す。

確かに似合いそうだよな。シャマルにメガネって。

「はぁ、わかりました」

シャマルはエヴァからメガネを受け取り、それをかける。

うん、似合ってる。

「じゃあ、説明しますね。リンカーコアというのは魔導師・・・貴方達の言い方だと魔法使いの魔力の源となる器官です。大気中の魔力を体内に蓄積して溜め込むだり、外部に放出するためにあります」

「ほぉ～、それは私達の世界の魔法使いの全員にあるのか？」

「おそらくですが、あると思います。ですがリンカーコアは先天的なもので後天的に生じることは殆どありえませんね」

「・・・なるほど。それで私のリンカーコアがどうかしたのか？」

「それですね。マクダウェルさんの総魔力量は私達の世界のランクでSなはずなんですけど、今の貴方のDランク・・いえEランクなんですよ。普通に大気中の魔力が蓄積されればSは絶対いく筈なんですけどね。なぜか、Eのままなんですよ。その原因に心当たりはありませんか？」

「・・・・・・・・」

エヴァは少し黙り、考え込むようにしてから・・・

「お前はどうにかできるのか？」

「え～と・・・・それなりの設備があれば・・・・」

「本当か！！本当にこの呪いをどうにかできるのか！」

「ちょ、ちょっと待って下さい。の、呪いってなんですか？」

「なんだと！呪いが解けるのではなかったのか！！！」

エヴァはガッーと叫びながらシャマルに詰め寄る。身体の大きさに差があるからそんなに怖くないはずだがシャマルはエヴァの勢いからか、かなり怯えている。

あ！　シャマルがちょっと涙目になってきた。さすが可哀相かな。そろそろ助け舟をだすか。

「ちょっと待てくれエヴァ。ちゃんと順を追って説明してくれよ」

「くっ！　わかった」

そうしてエヴァは呪いについて語り始める・・・・・

ーエヴァ説明中ー

「あ～、なんつかー。よくそんな、くっだらねぇー呪いを思いつけるもんだな」

ヴィータ、そんなこと言うなよ。エヴァにとっては死活問題なんだぞ。

まぁ、確かにくだらなくはあるけどな。

「う～ん、リインも面白い呪い作りたいですぅ～！　例えば小銭でお金を払う時、あと１円あればピッタリ払えるのに毎回１円足りなくて、１０００円を出す呪いなんてどうですかー？」

やめてくれよ、リイン。地味に・・・いや、すごく嫌だと思うぞ、それ。

「で？　シャマル、どうにかなりそうか？」

「え～と、私も呪いを受けた人を診るなんて始めてなので、なんともいえませんね」

それを聞いたエヴァは凄まじく落ち込んだ。

「あ！　落ち込まないでください！　呪いの方は私も診たことがないのでどうしようもありませんが、魔力の方は如何にかしてみせますから！！　元気をだして下さい！」

「・・・・・・」

エヴァはそれでもまだ落ち込んでいる。

「そうですぅ～。いざとなったらリインの持ってるロストロギアを使えばいいですぅ～」

ちょっと待て。リインはいまなんて言った。

リインノモッテルロストロギアヲツカエバイイデスだと・・・・！？

「リ・イ・ン・・・ちょっとお話をしようか？」

「あ、あれ～？　カイ君、ど、どうかしたですかー？　か、顔が白い悪魔みたいですよ？」

白い悪魔か・・・・・そうだな、白い悪魔風にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしよう。

「ちょ、カイ君！　思い切り握らないでください！！　痛いですー」

それでもおれは無言で部屋の奥へと向かう。リインはそこで助けを求める。

「アギト！　アギト！　助けてくださいですぅー！！」

「いや、無理。怖いし」

「アギトの裏切り者ぉぉぉぉーーー！！」

そしておれはリインを部屋の奥へと連れて行った。

「リインー！！　どういうことだ！　ロストロギアを持ってるというのは！？」

「いろいろ必要だと思って神様にお願いしてリインの四次〇ポケッ・・ゲフン、ゲフン。蒼天の中に入れてもらったんですぅー」

四〇元ポケットってドンだけ入れたんだよ。

「・・・・・どんなものがある？」

「え～と、魔法世界編のための戦艦とかレリックとかジュエルシードとかその他いろいろですぅー」

ちょっと待て、リイン・・・・・聞き逃せないのが幾つかあったぞ。レリックにジュエルシードだと！？　それに一番聞き逃せなかったのは魔法世界編だと！？

「なぁ？　リイン、もしかしてネギま！知ってるの？」

「あ、はい。リインとアギトは単行本もマガジンの方も読んだんで

すよー」

よ、予想外だ！　リインが原作知識アリだと！？　リインは電波だから役に立つか役に立たないかよくわからないな。

「・・・・なあ、悪いんだけどなおれは魔法世界編は関わる気はないんだけど」

とりあえず魔法世界編は本気で関わる気はないし。ヴォルケンリッターのみんなとか危険な目に遭わせたくないしな。おれも人外魔境に関わって死にたくないし。

「う～ん、まあカイ君が関わる気がなくてもロストロギアは持っていればいざっというとき役に立つですー」

そうかな？　まあ、でもいざって時がこないことを祈ろうか。

「しっかり管理だけしておけよな、リイン」

ジュエルシードあたりが外に出ちゃうと大変なことになりそうだからな。

「わかったですぅー！！」

「じゃあ、みんなのところに戻るか」

「はいですぅー！」

そしておれとリインはみんなのところに戻った。

・・・のだが、なぜかアインとエヴァが言い争いをしていた。

「だめだ！」

「別にそれくらいケチケチするな！　それに貴様には関係はないだろ！！」

「私にだって関係はある！　主に関することだぞ！！」

なんで二人は言い争っているんだ？　とりあえずシャマルあたりにでも聞いてみるか。

「シャマル」

「あ！　カイ君戻ってきてたんですね」

「ああ、それでなんであの二人は言い争ってるんだ？」

「なんでもマクダウェルさんがカイ君の血が欲しいと言っていて、それで・・・そのアインがそれに・・・」

「反対というわけか」

「そうです」

成る程な。エヴァはおれの血が欲しいわけか。別にやってもいいけど・・・・そういえばおれには聖王の鎧があるから無理じゃないか。確かアレは無意識に発動するからな。

さて、そろそろ二人を止めるか。

「二人ともそこまでにしておけ。エヴァ、血に関しては別に吸いたきゃ吸ってもいいから」

「ほんとうか！？」

「主！」

「アイン、大丈夫だ」

「しかし・・・」

「いいから、いいから」

「本当にいいのか？」

「ああ、かまわないけど・・・後でおれに文句は言うなよ」

「言うものか」

そしてエヴァはおれの腕に手をやり血を吸おうとするが・・・・・

＜ガチン＞

すごくいい音がした。

「――――■■■■■！！！」

エヴァは声にならない悲鳴をあげる。

あっちゃ～、すごく痛そうだな。

「あ～、大丈夫か？？」

おれの目の前でのた打ち回っている幼女に聞いてみる。

「カ、カイ、貴様・・・なんで私のキバがはいらないのだ！？」

「それはな～、おれには聖王の鎧っていう防衛能力があってなそれが発動したんだよ」

「なんだ！！　その聖王の鎧というのは！？」

「おれの遺伝子レベルで所有している防衛能力でな、その能力は五

体を武器化するってなんともチート染みた能力だぞ。ちなみにこれはおれの意思とは関係なく発動するからな」

「なんだ！　そのチートは！？　ではなにか、私はカイの血は吸えないというのか！　ではなぜ私に吸わせた！！」

「だから最初に言ったでしょ。文句は言うなって、それでもやらなきゃ納得しなかったでしょ。でもたぶん注射針は刺さると思うから血は少しはシャマルでも届けさせるよ」

確かヴィヴィっ子も点滴してたから注射針は刺さるよな。

「私は直接吸いたいんだぁぁぁ～～～！！！」

そんなことを言われてもおれには関係ないしな。

エヴァはある程度叫んだ後、なにかを思いついたか、ヴィータ達の方を見る。

今度はヴィータから吸おうっていうのか、でもヴィータは魔法生命体だからエヴァに血を吸わせてどういう影響がでるかわからないから止めとくか。

「エヴァ、ちなみにヴィータ達から吸うのもなしな」

「くっ！！　なぜだ！？」

「ヴィータは魔法生命体だからな。エヴァに血を吸われて身体になにか影響がでたらいやだからな」

「くそがぁぁぁぁーーーー！！！」

そうしてエヴァはこの後、しばらく落ち込んだとさ。

第４話（後書き）

戦闘が難しかったです。そしてエヴァが少し弱すぎた気もしないでもない作者です。

そしていろいろやらかした気がします。

こんな感じですがこれからもよろしくお願いします。

第5話（前書き）

今回は今までで一番ひどいかも知れません。

何度も書き名をしたり修正したりしましたがあり良いできではありませがよろしくお願いします。

そういえば最近、魔法先生ネギま！研究所というサイトを見て知ったんですが魔力量の多さって木乃香＞ナギ＞ネギ＞エヴァ　だそうですね。知らなかったです。ずっと木乃香＞ナギ＞エヴァ＞ネギだと思ってました。設定でもそう書いてたし・・・

それに麻帆良武道四天王が本気で戦うと刹那＞楓＞真名＞古になるんですね意外でした。刹那ってそんなに強かったのか・・・・気になっただけどなぜ神鳴流ってなんで飛び道具が効かないんでしょう。そうなるともしかしてスターライトブレイカーも効かない！？　いやないか、あれは殲滅兵器に近いからな・・・

それでは本編どうぞ。

第5話

ｓｉｄｅ　カイ

別荘から出てみてまず・・・・・

＜ＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉ＞

電話が鳴っていて、それを茶々丸さんがでる。

「マスター、お電話です。学園長からです」

「フン、わかった！」

エヴァはその電話を乱暴にとる。

「じじぃ！！　今日の警備の仕事はなんだ！？　アレほどの数とは聞いてないぞ！！！・・・・・・・なに、“予想より多くてごめんね♪”だっと・・・じじぃ！！　貴様、それで済ますつもりか！！・・・・・・なに？　“今回はコッチも悪かったなにか詫びをするだと”ふっ、そうだな貴様が持っていた秘蔵の酒があっただろ、それでいい・・・・・・・なんだと！　その酒はもう飲んでしまってもうないだと！！　貴様、そろそろ本気で死にたいらしいな・・・・・・・なに？　そんなとこより魔力が高い侵入者がいないかだと。いるぞ、７人プラス１匹、私が捕らえた・・・・・・なんだと、今から連れてこいだと・・・・ああ、まあいいだろ。行ってやるよ、じじぃ！　だが覚悟しておけよ！！！」

いろいろとツッコミたいんだけど、とりあえずおれ達ってエヴァに

捕まったの？　まあ、いいけど。

「とりあえず、じじぃの所に行くことになった」

「わかった・・・さっきの約束、頼むぞ」

「ふっ、わかってる」

さ～て、今からあの妖怪ぬらりひょんと対面か・・・・めんどくさい事にだけにはならないようにしよう。

「マクダウェル、その“じじぃ”とはどのようなどのような人物なのだ？」

シグナムがエヴァに質問する。

「ふむ、じじぃか・・・・私から言えることは食えないじいさんだな」

「・・・そうか」

「それで一応、関東魔法協会の理事なんだろ？」

「その通りだ」

「そうなんですか、主カイ。では警戒は必要ですね」

そう言うとシグナムはセットアップした。

「そうですね。警戒は必要よね・・・・」

シャマルもセットアップし騎士甲冑へと姿を変える。

「・・・・そうだな」

そしてヴィータもセットアップし騎士甲冑になる。

他のみんなはセットアップする必要があまりないのでそのままだ。

「おれも一応しておくか」

おれはモードをレイジングハートにし、セットアップする。

「お前達、そこまで警戒する必要があるのか？　お前達に敵うヤツなどこの学園にはいないと思うぞ」

「それでもだ。我々はあまり組織というものを信用できたものではないからな」

「そうだな・・・昔、アタシ達は管理局に罠に嵌められてことがあるからな」

そんなことがあったのか、管理局がね。罠に嵌めたのはクロノの父親、クライド提督かな。切れ者ぽそうだったし、輸送の責任者されるくらいだし、事件にも最前線にでてたのかな。

「だから私達は最低限の警戒は必要なんですよ」

「まあ、私もわからないわけではないがな」

そうだよな、エヴァも追われる身だったからな。

「では準備はもういいな。行くぞ」

ーカイ達移動中ー

おれ達は麻帆良学園の学園長室へとやって来た。そこには学園長とデスメガネこと高畑・T・タカミチがいた。そして学園長の姿を見るやいなや、シグナム達から思念通話で“アレは人間ですか！？バケモノではありませんか！！”ときた時は本気でコメントに困った。

そのせいもあるのか、シグナム、ザフィーラがおれの前に陣取って、護衛するかのような体制になった。

「フォ、フォ、フォ。君達が侵入者かの～・・・・・してお主達は何のためにこの麻帆良学園に来たのかの～？」

髭を擦りながらおれ達に質問してくるぬらりひょん、もとい学園長。

「・・・別に侵入したくて、ここに来たわけじゃない。“たまたま”転移魔法を使ったらここに来ただけの話だ」

「それは可笑しな話じゃのう、この学園の周囲には結界がはってあるのじゃ。それをこえてこれる魔法使いはそうそういなはずじゃしのう」

ああ、確かにあったな、そんな結界。でもカモがこえられるクラスの結界だろ、たいしたもんじゃないだろう。でも、この学園を情報を誤認させる部分はすごいけどね。一応、シャマルあたりに聞いて

みるか。

おれはシャマルに思念通話する。

（シャマル、シャマル）

（はい、カイ君。なんですか？）

（この学園に結界ってあるのか？）

（ちょっと待てください・・・・・・・・あ！　ありました）

（どうゆう結界だ？）

（う～ん、詳しい術式はわかりませんけど、あまり強力な結界ではありませんね。薄いです）

（そっか、ありがとな）

そうしておれはシャマルとの思念通話を終える。

「嘘つくな、爺さん。この学園の結界、すごく薄いじゃないか」

「薄いとは言ってくれるの、かなり強力な結界じゃぞ」

これで強力なのかよ。本気で大丈夫かよ、この学園・・・・。

「まあ、良い。ではお主達は“たまたま”この学園に来たのはわかった。じゃがここは、関東魔法協会の御膝元じゃ。それ相応の対応をさせてもらうぞ」

その言葉を聞いた瞬間、シグナム達の警戒心があがり、常人では考えられないほどの殺気とまがまがしい魔力が部屋に満ちる。

「そ、そう、殺気だったんでくれるかの？」

ぬらりひょんは凄まじい冷や汗をかいている。いい気味だ。

エヴァも楽しそうにニヤニヤ笑ってる。

「悪いが無理だ。おれ達は組織を信用しない。ゆえにおれ達はお前達と友好的なるのは無理だ」

「でもこれじゃあ、話し合いも出来ないんじゃないかい？　もう少しこの殺気を抑えてもらえないかい？」

いままで黙ってタカミチが話に参加する。

「まあ、そうだな。みんな」

「・・・・・わかりました」

そうして、シグナム達から殺気がなくなっていく。

「それでじゃ、お主達は侵入者ではないことはわかった。じゃが・・・」

「このままにはできないと？」

「その通りじゃ」

まあ、そこら辺はしょうがないか。

「・・・しかたない」

「では幾つか質問させてもらうぞ。お主達はどこから転移してきたのじゃ？　魔法世界かの？？」

おれ達のことを魔法世界のお尋ね者とでも思ったのか。

さて、どう答えるか・・・・・うん、適当にでっち上げるか。

「・・・ベルカ、ベルカというところから来た」

「ベルカ？？　魔法世界にはそのような土地の名前はなかったはずじゃが・・・・高畑君、君は聞いたことはあるかの？」

「・・・いえ、ボクも聞いたことがありませんね」

「ククククッ、それは当たり前だろ。そいつ等は異世界から来たそうだからな」

「なんじゃと！？　異世界じゃと！！」

「・・・・エヴァ、それはまじめに言っているのかい？」

「まじめも何も事実だ。こいつ等の魔法は私達のモノと全く別のものだった。そのことだけを見ても事実だと言えるだろう」

「・・・・オリジナルの魔法という事はないのかい？」

「ないな。オリジナルの魔法だとしても術式に私達と共通する部分が必ずでる。だが、こいつらの魔法の術式には共通の部分が皆無だからな」

術式に共通点なんてないだろうね。違いすぎるからな、かたや精霊の力で発動させる魔法、かたや自然摂理や物理作用をプログラム化することで発動させる魔法、共通点なんてあるわけないだろう。

「うむ、じゃが我々もこの眼でみなければ異世界の魔法など信じられんしな・・・・君達、悪いのじゃが、その魔法を見せてくれんかの～？」

あんまりみせたく無いんだけどな・・・・しかたない。エヴァの時と一緒で結界くらいはみせるか。

「・・・わかった、シャマル。封鎖領域を展開してくれ、この部屋だけでいいから」

「・・・・・わかりました。クラールヴィント、お願い」

『ｊａ．Ｇｅｆ？ｎｇｎｉｓ　ｄｅｒ　Ｍａｇｉｅ』

シャマルが封鎖領域を展開する。

「どうだ。この結界は空間切り取り、術者の選択した者を内部に残す効果をもつ」

「ホォ～、すごいものじゃな」

「・・・そうですね。ボクもこんな魔法はみたことが無いですね」

「この結界は主に魔法使いとそうでない者を区別し、魔法使いのみを結界内残すのによく使われる」

「それはとても便利だね。魔法の隠蔽にも使える」

「・・・なるほどのう。君達が異世界から来た、魔法使いという事はわかった。じゃが、なぜこの麻帆良学園に来たのかの？」

「わかった。おれ達がどうしてここに来たか説明する」

ー適当なウソを説明中ー

「なるほどのう。君達は儀式魔法を使用して、誤って次元震じゃったか？　それを起こしてこちらに来たと？」

「そうだ」

「その次元震とはどういうものなのじゃ？」

「世界単位での地震だとでも思っておけばいい」

「・・・それは相当に危険なものじゃないのかのう？　どんな魔法を使えばそんなことができるのじゃ？？」

「・・・・・それは答える義務はないな」

「そうか・・・ちなみに君達の魔法のじゅ「どうゆう術式かは教えない！」せめて最後まで言わせてくれんかの」

「言わせるか。絶対に術式は教えないからな！！」

「そこをなんとかできんかの～？」

「メリットが無い！」

そういうとぬらりひょんは少し考え込む。そしてなにか思いついたようだ。

「・・・・そうじゃ、お主達はたしか異世界から来たのじゃったな、ということは戸籍がないじゃろ、それにお金もないはずじゃ。それらをどうするつもりじゃ？」

やはりきたか、このぬらりひょんめ、人の弱みに付き込みやがって・・・・だが甘かったな、ぬらりひょん！！　おれはそこいらの転生者やオリ主とは違うんだよ！！！

「ハッ、戸籍はあるし、金もある！」

「・・・いやいや、ありえんじゃろ。異世界からきてなぜこの世界の戸籍に金を持っているのじゃ！？」

「・・・・ネット社会って便利だよな」

「「・・・・・・」」

どうだこの野郎！　撃沈してやったぜ！！

「・・・・じゃが、お主らは侵入者じゃしの～」

そこを蒸し返すかのか！？　ていうかなんで侵入者はだったら魔法の術式を教えなければならない。意味が分からないぞ。

「・・・そうか。それは悪かった、なら、今すぐ出って行ってやるよ！！！」

原作に関わらない。それをいいかもしれない。そう言いおれ達は出て行こうとする。

それを聞いたエヴァは少し焦っている。

「おい！　じじい！！！」

「君達！？　ちょ、ちょっと待てくれんかの？」

「・・・なんだ？」

「少しでいいのじゃ、話を聞いてくれんか？」

「・・・・フン、わかった」

「関東魔法協会としては君達のような者をこのまま見逃すことはできんのじゃ」

そうだろうな。おれ達このまま見逃すとかどうかしてるよな。

「・・・で？　なにが言いたいの？」

「・・そこで提案じゃ。お主達、ここで働いてみんか？」

やっぱり、そうきたか。

・・・・さて、どうするかな。うまくことを運ばないとな・・・・めんどくさい事になるな。

「ここで働く??　どういう意味だ?」

「そのままの意味じゃ。お主達のような凄まじく魔力の高いものが他の組織などにに行かれするのは関東魔法協会として見過ごすことはできんのじゃ。じゃがここで働いてもらえれば、その心配も無いからの」

「・・・ようは監視か・・・・ふん。まあ、いいだろう。ただし、いくつか条件がある」

「なんじゃ?」

「まず、おれ達のことを絶対に本国の魔法世界に報告しなこと」

これは本当に絶対だな。ばれたら本当にめんどくさいことになる。

「ふむ、少し難しいがいいじゃろう」

「次に働くのはいいが、仕事は一定しかしない。そして、その他の仕事をする時は必ず拒否する権利をもらう」

「拒否する権利とはどういう意味かの?」

「目立つ仕事はしたくないだけだ」

「そうことか。うむ、よいぞ」

ふっ、やったぜ。これでこのか護衛とか、ネギの護衛とかの依頼は断れる。ていうか、殆どの仕事は断る予定だからな。

「そういえば、仕事とはなにをするんだ？」

「フォ、そうじゃの。君達には警備員の仕事をしてほしいのじゃ。この麻帆良学園はいろいろと狙われるとってな、それらから生徒達を守るために警備員の仕事じゃ」

「わかった、引き受けよう。ただし・・・・」

「ただし？？」

「おれ達、全員で週2日な」

「フォ！！？　す、少なすぎじゃぞ！　それでは給料も払えんぞ！！」

「給料？　いらないからいいよ、別に」

リインの話だとこの地球でお金を稼ぐなんてすっげぇーー、簡単なことらしい。え？　なぜかって、電子株や電子マネーとかを適当に捏造できるらしいからな。

犯罪じゃないのかって、いいんだよ。リンディさんやエイミィさんもやっていたんだから。だって考えてもみてくれ、リンディさんはどうやって、あの高級マンションや戸籍を手に入れたのか・・・少

し考えれば分かるでしょ。それだとクロノって犯罪者なんだよな。地球の法律に当てるとだけど。

「せ、せめて週5日にしてくれんかのう？　給料はそれなりに払うつもりじゃぞ？」

「だからさ、金はあるの！　別に無料（ただ）でやるって言ってるんから週2日！！　これ以上はやらない！！」

「い、いや、さすがに週2日は・・・・・」

「いいじゃんか！！　別に！　働きたくないんだよ！！・・・・・・」

ーしばらく言い争い中ー

「はぁ、はぁ、はぁ・・・。もう少し、年寄りよりを労わろうとは思わんのか？」

「黙れよ。妖怪ぬらりひょんが・・・コッチは譲る気はねぇぞ。週2日だ」

「お主ら、それを本気で通すつもりか？」

通すとつもりかって通すし。というかだいたい、なんでおれ達が警備員の仕事なんかしなきゃいけないんだよ。

でも、このままってわけにもいかないか。

「・・・・そうだな」

「フォ、5日やってくれるかの？」

「そうじゃねよ。勝負だ、勝負しようぜ。爺さん」

「勝負？」

「そうだ。その勝負に負けたらおれ達は週5日の警備員の仕事をする。そちらの指示になるべく従う。さらにおれ達の魔法の術式を教えよう」

「・・・こちらが負けた場合はどうなるのじゃ」

「そうだな・・・警備員の仕事は2日。さらにおれ達の行動の自由と仕事以外のプライベートは不干渉にしてもらおう」

「それで？　その勝負の内容はじゃ？」

「じゃあ、そこのメガネのおっさんとおれとで戦うってどうだ？」

「ボクかい？」

「そうだ。あんただ」

「ははは、ボクか・・・・ボク、あまり強いわけじゃないんだけどね」

うぜえな。学園ナンバー2だろうが。

「タカミチ君が勝ったら君達の魔法の詳細を教えてくれるのじゃな

？」

「・・・ああ」

「フォ、フォ。いいじゃろう。その勝負、受けよう」

あれ？　簡単に受けやがった。もしかしておれ舐めてるのか・・・・？

くくく・・タカミチ、お前には絶対にＳＬＢを撃ってやる。

「主カイ、お待ちください！！　それなら私がやります！」

「・・・シグナム、いい。今回はおれがやる」

舐められたままてのはいやだしね。

それにおれの魔法（チカラ）がどこまで通じるかも試したしな。

「しかし！」

「・・・待てください、シグナム。カイ君がやりたいっているんですー。やらせてみるですー。別に殺し合いをするわけじゃないですよ」

「・・・リイン」

「なぁ、頼むよ。シグナム。今回はおれに任せてくれよ」

「・・・・わかりました。主カイ」

しぶしぶだったけど引いてくれたか・・・・

「じゃあ、時間と場所はそっちで決めろ。あとエヴァ、強制証文(ギアスペイパー)を一枚用意してくれ」

「構わんが・・・貸し一つだぞ」

うわ、エヴァ・・・・・けちだな。

「はぁ～、わかったよ」

「フォ、フォ、フォ。強制証文(ギアスペイパー)ならこちらで用意できるぞ？」

「フン、お前らの用意したのなんか信用できるか。なにか仕掛けるかもしれんだろ」

「信用ないのう」

「じゃあ、時間と場所が決まったらエヴァに連絡しろ」

エヴァと一緒に部屋を出て行った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　近右衛門

アレほどの魔力を持った者が複数、急に学園に現れた時はどこぞの最上位悪魔でも召喚されたと、かなり冷や汗をかいたがアレが人間の魔力じゃったとはさらに驚きじゃな。

アレはこのか以上に魔力が高かったのう。

そして、さらには・・・・

「フォ、フォ。異世界の魔法使いじゃたか・・・・高畑君、どう思うかのう？」

「そうですね・・・おそらくですが本当なんじゃないんですか」

「なぜじゃ？」

「魔法にはボク達が理解できないことがまだまだありますから・・・それにエヴァが事実と言ってますしね」

「フォ、フォ、フォ。そうじゃのう・・・・それより高畑君、勝てそうかのう？」

「そうですね・・・彼等の魔法がどうゆうものか分かりませんからね」

「学園のナンバー2が弱気じゃのう」

「買被りすぎです。ボクはそこまで強くありませんよ」

高畑君がそこまで強くないと言われると、この学園の者のほとんどは強くないとことになるのじゃがな・・・・・高畑君も、もう少し自分が強者ということを自覚してほしいのう。

「じゃあ、負けるということかのう？」

「そんなことありませんよ。彼の動きは明らかに素人でした。おそらく彼は魔法使いタイプでしょうからね。それならボクにも勝ち目があると思いますよ」

そうじゃ、彼の動きは明らかに素人じゃったな。

「フォ、フォでは明日は頼むぞ高畑君」

「・・・はい。分かりました。ボクも異世界の魔法に興味がありますからね。勝ちますよ」

第5話（後書き）

カイの強さについてですが、今はヴォルケンズやアインやリインやアギトを含めて一番弱いです。ですがそのうち一番強くします。

カイの魔法や格闘技の才能をネギやなのは以上のチートにさせてもらいます。お許しください。

ちなみに今一番強いのはアインです。ナギ以上に強い設定とさせていただきます。そしてアインの戦い方もＡ'ｓの戦い方からかなり変わります。

第６話（前書き）

ネギのパンチ力は実はすごいんじゃないかと思い載せてみる。

まず、ネギのサギタ・マギカはネギが魔力を込めたストレートパンチの威力だったはずだ。

それではネギの魔力を込めたパンチはどれくらいの威力なのか？

第５巻でアスナのキックで岩が破壊されたところを見ると、相当高いと見ていいだろう。私が調べた結果一般的な成人男子は１００ｋｇ前後、ヘビー級の空手家が３００ｋｇだそうだ。

ということなのでネギの魔力を込めたパンチ力は５００ｋｇとする。（少し高い気もするけどいっか！）

というわけでコミック２７巻でのサギタ・マギカは千一矢、５００×１００１とする。さらにラカンパワーが相当すごいということで、さらにこれを５倍にする。これを計算すると２５０２５００ｋｇ・・・・２５０２ｔだと！？

う～ん、ねぇーな！　この計算も合ってる気しないな！！

・・・・・・でもカイの本気のパンチ力は数万トンにでもしようかな。でも物理的にあり得ないよな。（でもファンタジーに物理法則をもってくるのなんだかな～て感じだしやってみようかな？）

でもネギのパンチは実はすごいと思う私です！！

てなわけ本編どうぞ！！

第6話

ｓｉｄｅ　カイ

昨日のぬらりひょん邂逅を終えてからおれ達は近くのホテルへ来た。そこで夜を明かした

「さて・・・夜まで、時間がまだあるな」

エヴァにはここの場所を教えておいたから時間と場所が決まったら知らせてくれるって言ってたし・・・さて何しようか。

おれはそうしてシグナム達のほうを見る。

「・・・とりあえず服だな。服を買いに行こう」

シグナム達の服装は未だに黒のワンピースだ。幾らなんでもこのままっていうのはまずいしな。

いや、まあ・・・おれにとっては福眼なんだけどね。

「というわけでみんな、服を買いに行くぞ！」

「服ですか？　主カイ」

「そうだ。これからみんなの服を買いに行こうと思う。とりあえず数日ぶんな」

いっぱい買う必要はないがそれくらいは欲しいよな、おれのも含め

て・・・・

「主カイ、我々はこのままでも構いません。十分です」

いや、シグナム・・・お前がよくてもおれが困るんだよ！！！　いろいろとな・・・・

「お金のことなら気にするなよ。結構持ってるから・・・」

神様のおかげでだけどな。

「お気遣いありがとうございます。ですが我々にその様な物は必要ありません」

「い、いや。必要ないって・・・・」

シグナム・・・おれもお前にかわいい服を着てくれって言ってるわけじゃないんだからさ・・・着てくれよ。

「カイ君・・・もしかして私達の格好って変なんですか？」

シャ、シャマル！！　ようやく気づいてくれたのか！

「いや、まあ、変じゃないんだけどな・・・うーん。なんて言うかさ・・・」

うまく言葉がでてこないぞ。

「カイ君、はっきり言うべきですぅー！！　シャマル達の格好は“エロい”と！！！」

「「「！！？」」」

ここでヴィータ以外の三人に衝撃が走る。

リイン、お前ははっきり言いすぎだ！！　いや、その通りだけどさ。

「カ、カイ君は私達の格好って“エロい”ですか？」

「いや、まあ・・・・なんと言うか・・・・・」

「エロくて恥ずかしい格好だと思うですぅー」

リイン、お前は本当にはっきり言いすぎだ！！

「「っく！？」」

シグナム、アイン。男にとってはすごくうれしい格好だぞ。

「・・・わかりました。主カイに恥などかける訳にはいきません。服を買いにいきましょう」

「・・・そうだな」

「・・そうね」

三人ともそんなに落ち込むなよ。

「なあ、なあ、カイ。アタシの格好ってそんなに恥ずかしいのか？」

「・・・そんなことないぞ、ヴィータ。エヴァも今のヴィータと似たような服を着ている」

「・・・そっか、そこまで恥ずかしくないのか」

よ、よかった。エヴァの趣味が変で・・・・常識的に考えて常時ゴスロリは無いよな。

「じゃあ、みんなで服を買いに行ってください」

「なんだよ。リインは行かねぇのか？」

「え？　ヴィータちゃん、リインに合う服がここら辺で売ってるとでも？？」

「あ・・・悪い」

「別にいいですよ。リインはここでお金を増やして、みんなの家を買っておきます・・・・あ！　カイ君、５０００万ほどお金を借りましたから。後、銀行の暗証番号はカイ君の誕生日ですからね」

「ん、わかった」

暗証番号はおれの誕生日の１月２３日だから０１２３か・・・・。

「ところでザフィーラはどうする？　一緒に行くか？？」

出来れば来てもらえると助かるわ。男一人に女四人は少しきついよな。

「いいえ、主、私はここに残ります。私に服などあまり必要ではありませんから」

クソ、おれの逃げ道が・・・

「そうか・・・わかった。あ！　でもザフィーラここでは狼にはなるなよ」

ホテルで狼の毛とかいろいろまずいからな。

「了解しました」

「よし！　じゃあ、みんな行くぞ！！」

「「「「はい（おう！）」」」」

そうしておれ達は服を買いに街へと出かけた。

ーカイ達移動中ー

そうしておれ達はお金を数十万ほど下ろしてから、ショッピングモールまで来た。いくらマンモス校とはいえショッピングモールまであるのかよ、麻帆良学園恐るべしだな。

「じゃあ、みんな好きな服を買ってきてくれ」

と、そう言うのだがみんな行こうとしない。

「あら？　みんな、どうして行かないんだよ？」

「カイ君、私達・・・どうゆう服がいいかわからないから・・・」

「主に・・・」

「主カイ・・・」

「カイに・・」

「「「「選んで欲しいの（です・だ）」」」」

マジか・・・おれに、おれに服を選べだと！？　こんな展開になるとは予想外だぞ。どうする、どうする、おれ！？

おれに女の子の服を選ぶセンスなんてあるわけないが・・・やるしかないのか。

「わかった。最初はおれが選ぶけど、二つ目から自分で選べよ」

そう言うとおれはみんなの服を選ぶ。

まずはヴィータだ。柄物のシャツとスカート、そしてリボンをつけた。やべ、無難なところに逃げたな。

次にシャマルだ。白のTシャツにジャケットを羽織らせて、長めの黒のスカートにアクセントにネックレスをつけた。う～ん、まあまあかな・・・・・。

次にシグナムだ。動きやすい方がいいと思い、デニムパンツにブラウスにした。うわ、簡単に済ませたな。

最後にアインだ。白のレースワンピースにデニムのジャケットを羽織らせた。まあ、かわいいから、いっか。

みんな、顔がいいし、スタイルもいいので似合っていて良かった。

その後、店員が話しかけてきて一人に一人の店員がついて、それぞれにヴィータはいろいろな服を着させられ、その中から変でないのをおれが選んだ。シャマルは店員と話しながら自分に合うのを決めていって、シグナムもすごい勢いで話しかける店員に若干ひいていた気もするが、なんとか自分で選ぶことが出来たようだ。でもアインだけはいくら店員に勧められてもおれに「これはどうでしょうか？　主カイ??」とか聞いてきて、結局すべておれが選ぶことになった。

おれも自分の服を買えたし、今回はいいか。金は数十万かかったけど、アパレルってこんなに高いのな。

それにしても・・・ここの店員はなんでナース服やチャイナドレスやメイド服なんかを勧めるんだよ!!　そんな服を着るヤツなんて・・・・・・・いっぱいいるな。普段着がメイド服やチャイナドレスってヤツはこの学園にはたくさんいたな。よくよく考えると本気で常識がどうかしてるな。ほぼ毎日コスプレパーティー状態だもんな。

「じゃあ、次ぎいくか!」

「「「「「はい（おう）！」」」」」

その後、履くものを買い、おもちゃ売り場でのろいのうさぎ人形があったので、それをヴィータがモノ欲しそうに見てたので買ってや

り、他のみんなにも小物なんかを買ってやった。
そして、最後に最大の難所が待ちうけていた。
「じゃあ、ここはみんなだけで行ってきてくれ」
「え？　なんでですか？　カイ君？？」
なんでかだと・・・いや、流石にここは無理だろ・・・
「いや、ここはちょっと・・・」
「カイ君、この際なんです。最後まで付き合ってくださいよ」
ニコニコ微笑みながら言う。
シャマル、もしかしてお前分かっててやっているのか？
クソ！　だが、おれは負けない！！　何とかこの場を乗り切ってやる！
「おれにもいろいろとじじょ「主カイ」・・・な、なんだ、アイン？？」
「また、選んでください？」
そう言いながらおれの腕を掴んだアインははそのままおれを店の中へ連れて行かれる。
くっ！？　意外な所から伏兵が！！　逃げようとするもアインの腕

を引っ張る力が強くて逃げられない・・・・。

「カイ君、またみんなのを選んでくださいね」

クソ！　シャマルめ！！

ああ、おれはこのまま入ってしまうのか・・・・・“ランジェリーショップ”に・・・・

で、結局はおれはランジェリーショップに入ってしまった。え？
感想・・・・・・・うん、すごくいいものが見れたよ。特にシグナムのは芸術だね。他のみんなのもよかったよ。ヴィータもシャマルもアインもよかった。けど・・・・・・・おれ、何かを、何かを失った気がするな、うん。

それに女の子の下着を選ぶのってヤダな。自分の趣味が丸分かりになるからな・・・・・。

もういいや、切り替えろよおれ！

「じゃあ、みんなご飯を食べにでも行くか」

「「「「はい！」」」」

そうしておれ達はその後、ご飯を食べ、リイン達のお土産を買ってホテルに帰った。

で、ホテルに帰ってきたわけなのだが・・・・・。

「ははははは、アメリカ金融機関覚悟ですぅー！！！」

リイン、何をしているんだよ。お前は金を稼ぐんじゃなかったのかよ。

「・・・リイン何している？」

「覚悟！！　リーマ○ブラ・・・・・・あれ？　カイ君、いつの間に帰ってきてたんですか？」

「今だ。後、ほら・・・・お土産だ」

「ありがとうですぅ。お金も大分稼げましたよ。ほら見て下さい」

パソコンを見ると桁が3桁は違う額が表示されていた。

・・・これって半日で稼げる額じゃないぞ。

「いい家も買えましたよ。場所も立地もなかなかです」

そう言うとパソコンを動かし不動産のページを表示する

確かに立地もいい、麻帆良学園から程近し、周りには建物が少くていいな。

「あ！　後、エヴァンジェリンさんから伝言で今夜１０時に世界樹の前になったそうです」

「・・・・・そうか。わかった」

さてと・・・・それじゃ、今夜の為の作戦とシミレーションをレイジングハートとしとくか・・・・。

そしておれ達は世界樹の前へとやって来た。

すでにそこにはタカミチとぬらりひょんとエヴァと茶々丸がいた。

「フォ、フォ、フォ。来たようじゃな」

「ああ・・・・じゃあ、さっそく強制証文(ギアスペーパー)だ。内容に不備が無いならサインしろ」

強制証文(ギアスペーパー)をぬらりひょんに渡す。

「・・・・・・問題はないようじゃな」

ぬらりひょんはサインをする。

「・・・じゃあ、早速だけど始めようか?」

タカミチが結構やる気満々だな。

「ああ、そうだな。だけどその前に・・・シャマル、結界を・・・・」

(ただし周りで監視しているヤツ等は結界から外してな)

見られているような感じの視線を感じるからな。おれ達の魔法を記録されたくは無いしな、特に明石教授や超にだな。

「分かりました。クラールヴィント、お願い」

『ja. Gef?ngnis der Magie』

封鎖領域が展開されていく。

「此方も人払いの結界は張ってあるじゃがな・・・・？」

「おれ達の魔法は少し派手だからな。おれ達も周りに被害がでないために気を遣ってるのだがな・・・・余計だったか？」

「・・・・フォ、フォ、フォ。そうゆことかのう。それはすまんかったのう」

「・・・そうことだ。じゃあ、やるかい・・高畑さん？」

「・・・そうだね。そろそろ始めようか。審判はエヴァ、君がやってくれるかい？」

「・・・・いいだろう」

そうしておれとタカミチは広場の真ん中に移動し、対峙する。

「・・・・では私が始めと言ったら始めろ」

「・・・わかったよ」

タカミチは両手をポケットに入れるいつものスタイルになる。

「了解。シュベルトクロイツ、モードチェンジ、レイジングハート・エクセリオン。セーットアップー！！」

『ｊａ．Ｆｏｒｍ？ｎｄｅｒｕｎｇ．Ｒａｉｓｉｎｇ　Ｈｅａｒｔ　Ｅｘｅｌｉｏｎ，ｓｅｔ　ｕｐ（了解。モードチェンジ、レイジ

ングハート・エクセリオン、セットアップ）』

おれもレイジングハートをセットアップし戦闘体勢になる。

ちなみにバリアジャケットはなのはのリボンのスカートのヤツから白いタキシードにネクタイとなった。あんまり似合ってないな・・・。レイジングハートは似合ってるって褒めてたけど・・・。

「気になってたんだけど、それはアーティファクトかい？」

それくらいは答えてもいいか・・・。

「これか？　これはデバイスって言って、おれの魔法の杖であり、相棒さ・・・・詳しいことはあんたに話す気は無いがな」

「・・・そうかい」

「では、そろそろ始めるぞ」

おれ達はエヴァの合図を待つ。

「・・・・・・・・・・始め！」

戦闘開始の合図が告げられる。

「先手はもらうぜ。アクセルシューター」

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

アクセルシューターを４つを精製する。

「シュートーー！！！」

そして、それをタカミチの正面に向かって打ち出す。

＜ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！　ヒュン！＞

しかし、それはタカミチの居合い拳によって相殺されてしまう。

「ふぅ～、この程度かい？」

タカミチはタバコを吹かしながら聞いてくる。

う～ん、軽く相殺されたか・・・・おれの魔力コントロール制度が低いからだよな、この結果は・・・。

やれやれ・・・・苦労しそうだぜ！

「フッ、まだまだよ！！」

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

おれは、またアクセルシューターを８つ精製する。そして、それを今度はタカミチを囲みこむようにホーミングし撃つ。これは当たったと思ったのだが、瞬動にてかわされる。

「今度はコッチから行くよ！！」

タカミチが接近してきて居合い拳を放ってくる。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

レイジングハートがプロテクションを発動させ、それを防いだ。

『Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ』

おれはさらにフラッシュムーブを使い距離をとった。

「なかなか・・やるね」

やれやれ、やっぱり接近戦はあっちの方が上か・・・・・・てことは作戦通りに空しかないな・・・・。確かタカミチの居合い拳の射程は１０メートルくらいだったよな。なら空に上がればほとんど問題ないな。

え？　卑怯じゃないかって、アーチャーさんも言ってたじゃないか。相手の土俵で戦う必要はない、自分の土俵で戦いえばいいてな！

「やれやれ、接近戦はあんたの方が上か・・・・・ならおれは・・・・」

言葉を言い終わる前に空へ上がる。

「空で戦わせてもらう！！　アクセルシューター！！」

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

アクセルシューターを今度は１６つ精製する。

「シュートーー！！！！」

タカミチはアクセルシューターを瞬動を使ってかわしたり、居合い拳を使い相殺させたりする。

しばらくこう着状態が続いたが、アクセルシューターで逃げ道をなくした所でおれが好戦でる。

「ディバイン・・・・バスタァァーーー！！！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』

虹色の閃光がタカミチを襲った。

＜ドガァァァン！！＞

完璧のタイミングで当てたはずだがそれは少しかすっただけだった。

「今のは危なかったよ。詠唱もなしにあんな魔法を撃つなんて驚いたよ・・・・・・これはボクも本気をだすべきかな」

・・・・ついに来るのか？

「左腕に魔力・・・・右腕に気・・・・合成！」

ついにきたか・・・・・咸卦法。

発動させた次の瞬間、タカミチは瞬動を使用しておれの目の前まで現れる。

「悪いけど、今回はこれで終わりだね」

タカミチはおれに向かって豪殺居合い拳を放とうとする。だがその瞬間に・・・・・・

『Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　Ｌｏｃｋ』

レイジングハートがレストリクトロックを発動させ、タカミチの五体を捕獲した。

「いや～、うまくいったな！」

おれは、このタイミングを待っていた。おれが空へ上がり、それをタカミチが追いかけて来たとことをレストリクトロックを発動させる。空でなら地上に比べてタカミチの動きも制限できる。ついでに今回はレストリクトロックに魔力を抑える効果を付け加えてことによって咸卦法も解除された。一石二鳥だな。

「・・・君はこれを狙っていたのかい？」

「ああ、そうだよ」

「・・・そうか。やられたな」

「さてと、じゃあそろそろフィニッシュだ。時間をかけたらレストリクトロックが解かれるかも知れないからな・・・・・まあ、かなり魔力を込めたからそうそうには解けないけどな」

「・・・・・・・」

おれの言葉にタカミチは答えない。

そしておれはレイジングハートを構える。

「今からだす魔法はおれの中でもかなりの威力を誇るんだ。さらにはゼロ距離だ、外さないぜ・・・・・・・・全力全開！！！」

レイジングハートに魔力が集束されていく。

タカミチは集束されていく魔力量の多さに冷や汗がたくさん噴き出している。

「スターライト・・・・・・ブレイカァァーー！！！」

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ』

極太の虹色の閃光がタカミチをすべてを包み込んでいった。

おお、初めて撃ったけど、やっぱり気分いいな。Ｓ・Ｌ・Ｂは・・・・それにしても原作よりも威力高くなかった？

やっぱりオーバーＳＳＳは伊達じゃないってことか。それにしてもタカミチはあれ一生のトラウマもんだな。ほぼゼロ距離、五体バインド、バリアジャケットなし、咸卦法もなしってフェイトよりひどくないか。一応、非殺傷設定で撃ったけどね。

あ！　タカミチが人形みたいに崩れ落ちていくな。気絶してるのか？

う～ん、このままじゃ・・・地面と顔面キッスだな。一応は助けてやるか。

「レイジングハート、ホールディングネットをお願い」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｔ』

ホールディングネットが展開され、ギリギリの所でタカミチを受け止める。

そうして・・・おれはみんなの所へと戻った。

「見事でした。主カイ」

いや、結構ギリギリだったけどな。

「そうですねー。かっこよかったですよー、カイ君。動けないところ撃つ、まるで魔王その者でした」

リイン・・・それはあまり褒めてないだろう。

「カイ君、次にああいうの撃つときは言ってくださいよ。結界の維持が大変だったんですから」

気をつけよう・・・・たぶん。

でも今回はスターライトブレイカーに結界破壊の追加効果は付けてないんだけどな。さすがS・L・Bだな。

「ククク、なかなか面白いもの見せてもらったよ。カイ」

ありがとう、エヴァ・・・でもさ念話でさっきの魔法について詳しく聞かせてもらうからなってとばすやめてくれないかな。そっちの念話の術式知らないから返せないじゃん。

そしてぬらりひょんも近づいてきた。

「爺さん、この勝負・・・おれの勝ちでいいんだよな？」

「・・・そうじゃな。それより、高畑君は無事なんじゃな？」

「ああ、それは大丈夫だぜ。非殺傷で撃ったからな、身体には怪我ひとつ無いはずだぜ」

「非殺傷??」

「おれ達の魔法には非殺傷設定って便利な機能がついていてな。身体にはダメージを与えず、魔力によるダメージを与えるという便利な機能がな・・・・・まあ、それは殺傷で撃っていたら・・・何ひとつ残らなかったろうけどな」

「高畑君の身体へのダメージはないんじゃな?」

「そうなはずだぜ」

精神的なダメージは知らないけどな。

「・・・・そうかのう」

「・・・じゃあ、賭けに勝ったんだから警備員の仕事は2日。さらにおれ達の行動の自由と仕事以外のプライベートは不干渉にしてもらおう」

「・・・・・了解じゃ」

「ああ、ちなみに破ったらさっきのを学園に撃ち込むからな」

「・・・・・・」

黙り込むぬらりひょん。

もし学園にS・L・Bを撃ち込んだらどれくらいの被害がでるんだろうな。A，sのときの闇の書の意思なみの拡散型のS・L・Bが

撃ってたら一発だろうけどな。

・・・・ちょっと待てよ。もしかしておれって拡散型のＳ・Ｌ・Ｂを練習すれば撃てるんじゃないか。今度アインと練習しよう。

「安心しろよ、爺さん。そっちがさっきの条件を破ったり、おれ達に敵対するような行動をしないなら、おれ達はお前達に被害をもたらす事はしないからさ」

これは本音だな。敵対しないなら基本的になにもしないさ。ネギや近衛このかの護衛とかも含めてだけどな。原作介入とか、ハーレムとかには興味ないしな。おれはヴォルケンズのみんなとそれなりに楽しく暮らせればいいし。

まあ、それを壊そうっていうなら容赦はしないけどな。

「じゃあ、そういうことでおれ達は帰るぜ」

そうしてタカミチとの勝負は終わりを告げた。

第6話（後書き）

今回も戦闘はひどかったな。

で、次回ですがカイ君達の修行場の話です。とんでもご都合主義な設定がでますが激しいツッコミは勘弁しください。

ではまた次回！！

第7話（前書き）

今回もやっちまったＺＥ！

激しいツッコミはやめてね！！

そして、今週のネギま！　あれって夜天の書の見せた夢のまんまじゃないと思ったのは私だけじゃないはず・・・・・

こんな感じですが本編どうぞ！！

第7話

ｓｉｄｅ　カイ

タカミチとの勝負から一週間がたった。今おれ達はリインが買った家にいる。その家とは3階建てで、部屋が１０部屋以上あるという豪邸だ。どれくらいの値段がしたんだろう。とりあえず掃除は大変だな。

家具や電化製品も揃えてやっと落ち着いてきたわけなんだが・・・・・

「・・・で？　リインはなんでみんなをリビングに呼び出したんだ？」

「え～とですね・・・・やっと家の片付けやその他もろもろが落ち着き始めたので、そろそろカイ君が魔法の練習とかを始めるべではないかと思ったんですよ」

う～ん、そうだな。確かに、練習はしたいよな～。

でも、場所がないんだよな。学園側のことを考えると結界張ってやるってわけにもいかないよな。外にでると監視されてる感じがあるしな。だからといってエヴァに貸しを作って別荘を使わせてもらってものなー。後がいろいろと大変そうなんだよな。むしろ貸しは作っておきたいんだよな。でもな～、しょうがないからエヴァに頼むかな。釈然としないけど。

「カイ君、まさかエヴァンジェリンさんに頼んで別荘を使わせても

らおうとか考えているんですかぁ～？」

「いや、そうだけど・・・・ていうかそれ以外ないだろう」

「カイ君、リインを舐めてはいけませんよ！！　エヴァンジェリンさんの別荘よりもすっごーーーい場所をリインは知ってるんですからね！！！」

いや、エヴァの別荘かなり高性能だろ。１時間を２４時間にするとかはっきり言ってチートだし。理論的なことはまったくわからないけどな。どうやったらそうなるんだよ、時空を歪ませるのか？　わからないな。

「で？　それはどこにあるんだ？」

「コッチですー。着いて来てください」

そうして、リインの後を着いていくと家の一番奥の部屋へとやって来た。

「お、やっと来たか、コッチはとっくに準備終わってるぜ」

そこにはアギトがいて、何か作業を終えたところのようだ。

「アギトちゃん、ちゃんと座標合わせましたか？」

「ああ、ばっちりだぜ！」

「リイン・・・それは？」

「これはですね・・・・」

「転送ポートよね。これ・・・」

「シャマル！　リインのセルフ取っちゃだめですぅ～！！」

転送ポートか、てことは別世界に行くってことか・・・・・う～ん、なんか落ちが見えて気がする。たぶん、ていうか絶対にモンハンぽい世界に行くんだろうな。大体の決まりだし。

まあ、それはそれで楽しそうだからいいけど。

「じゃあ、みんな転送ポートに乗ってください」

そうして、ザフィーラを除いた。全員が転送ポートに乗る。え？その前になぜザフィーラも行かないのかって。そんなの家に誰もいなかったら危なそうだからな。学園側の一応の対策だ。

「じゃあ、行くですよぉ～！！」

モンハンか・・・・楽しみだな！

で、着いたんだが・・・・・・モンハンのかけらもないな。
どう見ても人工的にの作られたって感じのする場所だな。
「おい、リイン。ここはいったいどこなんだよ？」
ヴィータが質問する。
「え～と、ですね。ここはアルハザードです！」
え～と、ちょっと待とうか。モンハンぽい世界じゃなくて軽くショ

ックだったが、それが思いっきり吹き飛んだぞ。アルハザード　ってあれか・・・・・プレシア・テスタロッサが目指していた、死者蘇生の魔法やら、今は失われた秘術があるとかいう。あのアルハザードなのか。ここが・・・・・？

「ちょっと待て！？　リイン、あなた本当にここが今は失われた秘術が眠る土地って言われているアルハザードだって言うの！？」

「ええ、そうですよ。だって書いてじゃないですか。ほら、ここですぅ～！」

リインの指差す先にはなんかよくわからない古代文字のようなものが書かれていた。

「シャマル、なんて書いてあるんだ？」

「・・・・カイ君、すいません。これ読めません。この文字はベルカ初期時代に使用されていたもので私でもちょっと・・・・・」

「そうか」

まあ、しょうがない。リインに教えてもらうか。

「アルハザード1階」

「え？　アイン、これ読めるのか？」

といか今、1階いって言わなかったか。なんだよ1階って！

「はい。私はこの文字を使ってましたから・・・」

夜天の書ってそんなに昔からあったのか。
まあ、確かに夜天の書は魔法の記録のために作られたんだもんな。
ベルカ初期時代からあって当たり前か。

「お姉ちゃん、すごいですぅ～。リイン、これを解読するのに１ヶ月かかったのに！」

待てよ。ていうことはリインは１ヶ月もここにいたのか？　でも、リインはずっと家にいたよな。たまにいなくなる時もあったけど。

「リイン、ちょっと待って！　リインはずっと家にいたじゃないか。なんで１ヶ月もいれるわけないだろ」

「ああ、それはですね。ここと地球とでは時間の進み具合に差があるからですよ。ちなみに地球での１時間はここでは１０年ですよ！　すごくないですか！　エヴァンジェリンさんの別荘の３６５０倍ですよ！！」

いや、すごいけど・・・どんだけだよ。でもどうやったらそんなに時間に差が生まれるんだよ。

時空の歪みからくる時間の差はすごいものがある聞いたことがある。確か、ブラックホール内でおこる時間の流れはほぼ時間停止のようだとか・・・・・・・

「でも、どうやったらそんなに時間に差が生まれるんだよ・・・・？　どういう理論でそうなるんだよ」

「理論ついてですか～？　リインの調査したんですけど詳しくはわからなかったんですよ。どうもロストロギアが使われれいるみたいでしたので・・・・・」

まあ、そうだよな。それにしてもロストロギアが使えれているのか・・・・・・それじゃあ、それに対して理論とか無駄かな。

「でも、リインの憶測でもいいなら聞きますか？」

憶測か・・・それでもいいか。

「聞かせてくれ」

「じゃあ、一つ目は可能性は・・・まずはカイ君はワームホールを利用したタイムマシンについて知ってますか～？」

「ああ、一応は知ってる」

ワームホールを利用したタイムマシン・・・確かカリフォルニア工科大学のキップ・ソーンが発表したもので、過去にいけるタイムマシンの理論の一つだ。

片方の穴の方の空間を光速に近い速度で移動させることにより、相対性理論からもう片方の穴の空間の時間の遅れ始めるので、そのことを利用したタイムマシンのはずだ。

相対性理論から物体というものは速さが速くなればなるほど、その中の時間は遅れてくる。それは光速のロケットを使い未来へ行くというものが有名だろう。さらには物体に速さによる時間の遅れについてはちゃんとした実験もしている。航空機に乗せた原子時計が進

みがわずかに遅れたというものがあったはずだ。

このことからも時間の遅れとは起こりうる現象ということだ。

まあ、それでもおれはエヴァの別荘の理論だけはぜんぜん理解できないけどな。なんで、２４時間たたなきゃ出れないんだよ！！　本気で意味が分からないし！

ちなみにワームホールとは時空のある一点から別の離れた一点へと直結する空間領域でのトンネルのような抜け道のようなものだ。わかりやすくいえばドラ〇もんのどこで〇ドアことだ。

え？　なんでそんなこと知っているかって、理系だからさ・・・・・・・・・ごめんなさい。嘘です。高校のとき物理の先生がこういう話をよくしてたの覚えていただけです。

「そうですかぁ～、じゃあ、説明はいいですね」

「ちょっと待て！　アタシはぜんぜんしらねぇぞ！！　説明しろ！！」

ヴィータは知らなかったようだ。ていうか他のみんなもついていけてない様だな。

「そうですかー。じゃあ、一応説明しますね」

ーリイン説明中ー

「じゃあ、なにかこの建物は光速で動いてるってことか・・・ありえねぇだろ」

「そうね・・・幾らなんでも光速は・・・」

「だが、理論的に可能という事はわかった」

う～ん、でも少し疑問が残るんだよな。

「なあ、リイン。確かワームホールでの移動の際は時間の遅れは起きないはずだろう」

「そうですねー。それはワームホールの代わりに転送ポートを使っているからです」

「転送ポート・・・？」

「そうです。転送ポートというのはワームホールとは違って常にそこの空間同士を繋げているいるわけではないですからね」

なるほど。確かにキップ・ソーンの定義では常にワームホールは繋げぱなしだったな。だから時間の遅れっていう現象が起こるのか。

「ちなみにここの転送ポートはロストロギアぽいですね。すごい技術が使われた特殊なものですね」

「へ～、なるほどな～」

普通の転送ポートじゃ光速で動いているのに転送するのは不可能そうだもんな。

「二つ目はやっぱり可能性は時空の歪みからくる時間の遅れですか

ね～」

それの可能性もあるな。でもあれは凄まじい重力での現象なはずなんだけどな。ブラックホールとか・・・・・・まあ、でも魔法に空間を歪ませるものがあるから、それに対して地球の物理学にあてるのも微妙なところか。

「私達からしたそっちのほうがなんとなく納得は出来るわね・・・・・」

「・・・そうだな」

「でも、リインは個人的に一つ目の方が可能性は高いと思うんですけどね」

そういえば・・・・座標を少しずらしたらどうなるんだろう？

「リイン、座標少しずらしたらどうなるんだ」

「ずらしたらですかー。全然知らない星に着きましたよ。番号を一つ前にずらしても、一つ後ろにずらしても結果は同じでした。不思議なものですよね～、このアルハザードの座標番号にするとあの転送ポートにたどり着くような仕掛けがあるみたいですね～」

凄まじい仕掛けだな。まあ、ロストロギアだしな・・・・・

この座標番号はリインはどこで知ったんだ？　神様から聞いたのか？

「なあ、リイン。アルハザードの座標番号はどこで知ったんだ？」

「座標番号ですかー？　蒼天の書に載ってましたよ。おそらくカイ君の夜天の書にも載っているはずですよー」

そんなものが夜天の書に・・・・・

「アイン、調べてくれ」

「わかりました、リイン。座標番号を教えてくれ」

「はいですぅ～！」

「・・・・・・・ありました。かなり深層の部分にあったので今まで気づきませんでした」

あったのか、ということは夜天の書とアルハザートには繋がりがあったということか・・・・・・これは原作にはなかったはずだよな。これは夜天の書が修復されたことによるせいか。

原作では防衛プログラムと共に大半のデータが破壊されてたて消えたからな。う～ん、原作には無かったアルハザードか・・・・・確かここの技術を使ってスカさんは生まれたんだけ？　いろいろとありそうだな・・・・・・いきなりバイオハザードぽいもの出てこないよな・・・・・・

「もぉ～！　カイ君、そんなに心配そうな顔しなくても大丈夫ですよ。ちゃんと調査しましたから！！　お化けとか霊とかでませんから、設備もすごいですし、ここでならカイ君も全力をだしても大丈夫なんですからね！」

そうだな・・・・そこまで気にするのはやめるか。便利なことは確

かだしな。

「そうえいば・・・1階ってことは上か下にいけるってことか？」

「そうですね～。ここは地下に深く続いてますねー。リインが行ったのは地下3階までですね。それより下はセキュリティがすごすぎていけませんね」

地下に続いているのか・・・・・なんか一番下にはなにかあるパターンだよな。

「リイン、ここに失われた秘術はあったの？」

シャマルが質問する。

確かにあったら便利だよな。失われたといわれる魔法・・・・・・夜天の書に記録させてもらえば、まさに鬼に金棒だよな。

「リインが調べた地下3階までにはそういうのはありませんでしたね。研究施設の設備と訓練場ぽいところだけでしたね。もっと地下深く行けばあるかもしれませんけど・・・・」

「・・・そうなの」

「なんだ・・・シャマル、失われた秘法とやらに興味でもあるのか？」

「別にそうゆうわけじゃないわよ、シグナム。でもマクダウェルちゃんの呪いについてぜんぜんわからないから少しでも役に立てばなーって思っただけよ」

「なんだ？　ぜんぜん治療は進んでないのか？？」

「そうね。2回ほど診断したんだけど・・・・・呪いなんて診るのは初めてだし、治療方法もわからないし。正直、暗中模索ってところかしら」

「そうなのか・・・・」

やっぱり、そう簡単には呪いは解けないのか・・・・・まあ、しかたないか。

「まあ、エヴァンジェリンさんの呪いはとりあえず措いておいて、行きましょう！」

「そうだな」

そうして、おれ達は訓練場や研究施設がある場所へと進んで行ったのだが、その途中で・・・・・・・・・

―・・・・・・待っていた・・・・・―

「え？　今、誰かなにか言ったか？」

「いえ・・・・なにも言ってませんけど・・・どうかしましたか？
カイ君？？」

「今・・・声が聞こえなかったか？」

「いえ、別になにも・・・シグナムは、なにか聞こえた？」

「なにも聞こえませんでしたが・・・・・」

「他のみんなも聞こえなかったか？」

そう聞くが誰も聞こえてないみたいだ。

「どうかしたのかよ？？　カイ？」

「待っていたって・・・聞こえたんだけど、みんな本当に聞こえなかったか？」

もう一度聞いてみるが誰も聞こえていなかったみたいだ。

「気のせいではないのですか？」

「そうなのか・・・・・？」

だけど、確かに聞こえたんだけどな・・・・・念話や思念通話みたいだったけど微妙に違ってはいたんけど・・・・・・

―・・・お前を待っていた・・・・・―

「また！？」

「聞こえたんですか～？」

「ああ、また待っていたって・・・・」

「アタシ達には何も聞こえないけどなー」

おれにだけ聞こえている。他のみんなには聞こえてないみたいだ。

―・・・待ってい・・・た・・ぞ・・ベル・カ・・の・・聖・・王・・・・わ・・・―

待っていたぞ、ベルカの聖王わ？

「カイ君、また聞こえたんですか？」

「待っていた、ベルカの聖王って・・・・・・」

「待っていた、ベルカの聖王ですか・・・・」

「ああ、そう聞こえた」

「そうですか・・・・う～ん、アルハザードと聖王になにか関係があるってことなのでしょうか～」

そうなのか。聖王とアルハザードにも関係があったのか？

「まあ、とりあえずカイ君・・・また聞こえたらリイン達にも教えてくださいね」

「ああ、わかった」

結局、この後その声は聞こえなくなり、声の主の正体もわからないままとなった。

しかしおれは後にこの声の主と会うことになる。意外な真実ともに・・・・・・・・・

第7話（後書き）

作者の物理知識は低いからこんなもんだＺＥ

だから激しいツッコミやめてね。慣性の法則はどうするのとか、相対性理論から光速なんて超えられねえとか、そもそもこの相対性理論に穴があるんじゃないのとか言わないでください。ご都合主義の小説なので許してください。ロストロギアチートです。

そして伏線をはってみました。これを回収するのは学園祭の後くらいなります。

次回ですが閑話になります。本編に関係ある何話か書くつもりですのでよろしくお願いします。

最後に一応ワームホールを利用したタイムマシンの原理とワームホールについてを載せて置きます。

カリフォルニア工科大学のキップ・ソーンは、時空の異なる2点を結ぶトンネルであるワームホールを利用するタイムマシンの仮説を発表している。この仮説の原理は、片方の穴を光速に近い速度で移動させると相対性理論により時間の進行が静止している穴よりも遅延する現象を利用するものである。

1．穴ＡとＢはワームホールの出入り口で相互に接続されている。ワームホールは瞬時に通過できる。
2．０：００にＡは静止した状態で、Ｂのみを光速に近い速度で移動させる。運動しているＢの時間進行はＡより遅れる。
3．Ａの地点で３：００の時、Ｂの内部は２：３０である。

４．Ｂを光速に近い速度で戻す。Ａ地点で５：００の時、Ｂの内部は３：３０である。
５．Ｂはさらに光速で移動し、最終的にはＡ地点が６：００の時、Ｂの内部は４：００となった。
６．６：００にＡ地点から出発したロケット（Ｘ）が光速に近い速度でＢ地点へ向かい、１時間掛かけて到着した。
７．Ｂからロケットはワームホールに入るが、Ｂの内部は５：００であり同じ時間のＡと接続しているため、戻ってきたＡ地点の時刻は出発した時刻よりも前の５：００であり過去への時間旅行が成立する。

日本ではこの原理を利用したタイムマシンの特許とされるものが合計で５つも登録されている。これは特許庁の特許電子図書館などで確認可能。

ワームホール　（ｗｏｒｍｈｏｌｅ）　は、時空構造の位相幾何学として考えうる構造の一つで、時空のある一点から別の離れた一点へと直結する空間領域でトンネルのような抜け道である。

もし、ワームホールが通過可能な構造であれば、そこを通ると光よりも速く時空を移動できることになる。ワームホールという名前は、リンゴの虫喰い穴に由来する。リンゴの表面のある一点から裏側に行くには円周の半分を移動する必要があるが、虫が中を掘り進むと短い距離の移動で済む、というものである。

ジョン・アーチボルト・ホイーラーが１９５７年に命名した。

ワームホールは、アインシュタイン－ローゼンブリッジとも呼ばれるが、現在のところ、数学的な可能性の１つに過ぎない。シュヴァルツシルトの解で表されるブラックホール解は、周りの物質を何でも呑み込む領域を表すが、数学的にはその状況を反転したホワイト

ホールも存在する。ブラックホールとホワイトホールを単純に結んでワームホールと考えてもよいが、この場合は通過不可能である。電荷を加えたブラックホールでは、通過可能になり得るが、元の場所へは戻ってこられない。また、観測的には、ホワイトホールのような領域の存在を示唆する事実は全くない。

しかし、通過可能なワームホールを考えることは研究上の遊びでもあり、キップ・ソーン（Ｋｉｐ Ｔｈｏｒｎｅ）らの１９８８年の論文を端緒に市民権を得ている。小説「コンタクト Ｃｏｎｔａｃｔ」を執筆中だったカール・セーガン（Ｃａｒｌ Ｓａｇａｎ）が、地球外生命との接触が可能になるようなシナリオをなんとか科学的に作れないか、とソーンに話を持ちかけたのがきっかけだったという。ソーンらは「通過可能であるワームホール（ｔｒａｖｅｒｓｉｂｌｅ ｗｏｒｍｈｏｌｅ）」を物理的に定義し、アインシュタイン方程式の解としてそれが可能かどうかを調べた。そして、「もし負のエネルギーをもつ物質が存在するならば、通過可能なワームホールはアインシュタイン方程式の解として存在しうる」と結論し、さらに、時空間のワープやタイムトラベルをも可能にすることを示した。ただし、ここでの研究は、現在の技術では制御が難しい高密度の負のエネルギーの存在を前提としており、また、どうやってワームホールを通過するのか、あるいは出口がどこなのかは全くの未知の問題として棚上げされた上での研究である。後に、ソーンの考えたワームホール解は不安定解であることも、数値計算から報告されている。

ｗｉｋｉより引用

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2113i/

麻帆良に舞い降りし夜天の聖王

2011年7月24日17時54分発行